

4. 鳥類

鳥類においては、絶滅の恐れのある種の特定作業については、以前から国際的な鳥類保護機関によって取り組まれてきた。その一つは IUCN（国際自然保護連合）のレッドリストであり（IUCN, 1996），それらの種の概略的な現状に関する記述は、バードライフインターナショナルのレッドデータブック（Collar et al., 1994）に掲載されている。このリストの掲載種であって、県内に生息している種については、その保護の重要性からいって、優先的に保全対策が図られることが国際的に要請されているものと考えられる。また、日本を地理的な対象範囲として絶滅の恐れのある鳥類を選定したものとして、環境庁（1998）のレッドリストがある。そのリストに掲載され、県内に生息している種については、国際的な重要種に次いで保全策が図られる必要があると考えられる。なお、これらのリストに掲載されている種の中で、水鳥の一部については、我が国の現状が詳細に、水産庁版レッドデータブック（水産庁, 1995, 1996, 1997, 1998a, 1998b）に記述されている。本書においては掲載種に対して、これら IUCN, 環境庁, 水産庁のレッドリストまたはレッドデータブックでの絶滅危惧に関するカテゴリーも示した。本書はその性質上、福岡県という地理的範囲を設定した際に、その地域から絶滅の恐れがあると考えられる種を選定することになる。しかし、地球レベル, 国レベルでの判断とも密接に関連していることも考慮した。

カテゴリーと選定基準

鳥類の掲載種の選定にあたっては、環境庁の新基準（環境庁, 1998）に準拠して、これまで福岡県内で確認記録のある種について、文献情報, 個人情報, 現地調査の結果を考慮して、各カテゴリーに該当する種を決定した。使用したカテゴリーは以下のとおりである。

絶滅：すでに絶滅したと考えられる種。

絶滅危惧 I A 類：ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高い種。

絶滅危惧 I B 類：I A 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高い種。

絶滅危惧 II 類：絶滅の危険が増大している種。

準絶滅危惧：絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては、上記ランクのいずれかに移行する可能性のある種。

保全対策依存：現在保全策が継続実施されているが、その保全策が中止された場合に、絶滅の恐れのある状態に移行する可能性のある種。このカテゴリーは、環境庁基準にはないが、IUCN 基準（IUCN, 1994）を参考にして付け加えた。

情報不足：条件によっては絶滅の恐れのある状態に移行し得る属性を持つが、生息状況等の情報が得られていない種。

重要なハビタット

いわゆるレッドデータブックでは種などの分類群についての評価が中心となっている。掲載されている種の保護を図るためには、当然にその生息環境の保全が図られねばならない。本書でも各種記載の中で、生息環境について記述してあるが、福岡県全体を見渡した場合に、絶滅の恐れがある鳥類に関して特に重要と考えられる地域についてここに簡略に取り上げておく。

（島）

沖ノ島（小屋島を含む）：大島村。全島が常緑広葉樹の自然林におおわれ、カラスバト, ウチヤマセンニュウが繁殖し、またオオミズナギドリの集団繁殖地となっている。国設鳥獣保護区の特別保護地区や天然記念物（「沖の島原始林」）に指定されていて、沖ノ島そのものについては環境悪

化の心配は今のところない。属島の小屋島では、カンムリウミスズメやヒメクロウミツバメが繁殖するが、ネズミ類の再侵入による繁殖コロニーの崩壊の危険がある。

烏帽子島：志摩町。岩礁島で無人灯台があるだけで、県設鳥獣保護区の特別保護地区になっている。

カンムリウミスズメやアマツバメの集団繁殖地となっている。被害はまだ出ていないが、ネズミ類の侵入による繁殖コロニーの崩壊に注意する必要がある。

白島：北九州市。男島と女島からなり、男島は常緑広葉樹林におおわれカラスバトが繁殖し、またオオミズナギドリの集団繁殖地となっている。春秋の渡りの時期には陸鳥の中継地になっている。

白島石油備蓄基地があり、大部分が県設鳥獣保護区の特別保護地区になっている。

大島：大島村。島の大部分が常緑広葉樹におおわれカラスバトが繁殖する。

志賀島（沖津島を含む）：福岡市。冬季には周辺の海域でカンムリウミスズメやシノリガモが生息し、属島の沖津島ではウチヤマセンニュウが繁殖する。

大机島：福岡市。ウチヤマセンニュウの繁殖地として重要である。

姫島：志摩町。自然林化している二次林にはカラスバトの生息が確認されている。

三池島：大牟田市。三井三池炭鉱の坑内への送風施設として建設された人工島であるが、島の砂礫地では近年になってコアジサシとベニアジサシが集団で繁殖することが明らかになった。

(水辺)

曾根干潟とその周辺：北九州市・苅田町。約500haの砂泥質の干潟と水田地帯など約650haの後背地が広がる。ズグロカモメ、ツクシガモ、ダイシャクシギの我が国有数の越冬地であるとともに、カラフトアオアシシギなどシギ、チドリ類の重要な中継地となっている。

和白干潟とその周辺：福岡市。水域は砂質干潟と浅海域からなり、後背地には水田のほか住宅地がせまっている。クロツラヘラサギ、ズグロカモメ、ツクシガモが越冬するとともに、ヘラシギなどシギ、チドリ類の重要な中継地となっている。

瑞梅寺川河口とその周辺：福岡市。砂泥質の干潟と水田地帯の後背地からなり、クロツラヘラサギ、カラシラサギ、ズグロカモメの越冬地として重要である。ヘラシギ、カラフトアオアシシギなどシギ、チドリ類の重要な中継地ともなっている。

有明海干潟：柳川市・大和町・高田町・大牟田市。有明海に広がる広大な干潟のうち、福岡県部分の20kmほどの海岸線の地先にある干潟である。以前には極めて多数のシギ、チドリ類が渡来していたが、近年にはその渡来数が激減している。しかし、将来の渡来数回復にそなえる意味でも、また諫早湾干潟の消滅という状況から考えても、当地の干潟の保全は重要である。

(平地)

筑後川：田主丸町など。九州の中で一番の大河川であるが、鳥類では河川敷でのツバメチドリの繁殖が特筆される。

(山地)

英彦山とその周辺山系：添田町・宝珠山村・犀川町など。多くの森林棲鳥類の生息地として知られる。特に、クマタカなどのタカ類、コノハズク、ブッポウソウの生息地として重要である。

古処山とその周辺山系：甘木市・嘉穂町など。英彦山山系とも連なり、森林棲鳥類の重要な生息地であるとともに、近年ではクマタカの生息地としての重要性が知られてきた。

釈迦岳とその周辺山系：矢部村・星野村など。森林棲鳥類の生息地であるとともに、大分県側の森林地帯をも含めてクマタカの生息地としての可能性が示唆されている。

(武石全慈)

絶滅 (福岡県)

トキ

コウノトリ目 トキ科 Threskiornithidae

学名: *Nipponia nippon* (Temminck, 1835)

カテゴリー: 野生絶滅 (環境庁), CR (IUCN)

生息状況・危機の状況・選定理由: 筑前国続風土記 (1703), 筑前国産物帳 (1736) には, 県内におけるトキの記載はないが, 筑前国続風土記附録 (1798) には「國中所々に集まりをれり」とある。また, シーボルトは1826年の江戸参府の途中, 北九州市木屋瀬から茶屋の原の間で聞いたこととして「(早春に) 高縄というワナにトキがかかるのも珍しくない」と記している。筑前誌 (1903) では, 福岡市の大濠に, 幕末 (1860年ころ) には毎年晩秋にツルやガンにまじってトキが北方から渡って来て, その美しい羽を落としたこと, また明治になってからは, 銃猟が大に行われたため, 1900年ころには渡来しなくなったことが記されている。また, シーボーム (1890) もトキが九州に分布すると記している。このように, 県内では江戸時代末期から明治中期にかけてトキが生息し, その後は絶滅したと考えられる (安田, 1983, 1984; 山階ら, 1983)。

分類・形態: 全長76cm。全体が淡い桃紅色。顔は皮膚が裸出して赤い。黒く長い嘴は湾曲し, 先端は赤い。後頭に冠羽がある。繁殖期, 顔からの黒色分泌物を背にぬる。

分布: (県内) 江戸時代末期には北九州市, 福岡市に渡来したという。

(県外) 佐渡で6羽 (日本産1羽, 中国産個体由来5羽) が飼育されている (2000年9月現在)。

(国外) 1997年春の時点で, 中国陝西省洋県に野生個体44羽, 飼育個体25羽, 北京動物園に飼育個体15羽がいるという (環境庁, 1997)。

生活史・生態・生息地: 山間の水田, 小川などで, 泥や水中の小動物を食べる。大木の樹上を営巣やねぐらに利用する。非繁殖期には群れる。

法令などの指定状況: 文化財保護法 (種指定の特別天然記念物), 種の保存法 (国内希少野生動物種) (武石)

絶滅 (福岡県)

オナガ

スズメ目 カラス科 Corvidae

学名: *Cyanopica cyana japonica* Parrot, 1905

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 柳川市, 久留米市, 三橋町などでは, 昭和初期までは年中生息しかつ繁殖していた (川口, 1937)。その後の記録としては, 筑後市での観察事例1例 (1944年), 三橋町でのカササギ群からの排撃事例1例 (1944~1950年に1回), 瀬高町での捕獲事例1例 (1958年), 久留米市での観察事例1例 (1958年) がある (倉成, 1962b)。1958年に久留米市宮の陣で巣から落ちた雛1羽が同市三本松動物園で飼育され, 1962年9月14日に死亡したのが, 県内最後の個体ようである (倉成, 1962a)。絶滅の原因は不明だが, カササギとの競合の結果との推測がある。

分類・形態: 全長37cm。頭は黒色, 腹と背は灰色, 翼と尾は青灰色。尾は長い。五百沢ら (2000) 参照。

分布: (県内) かつて, 柳川市, 三橋町, 久留米市,

筑後市, 瀬高町からの観察例や捕獲例があった。

(県外) 留鳥として中部地方以北の本州のみに生息する。佐賀県では, 佐賀市とその周辺で1930年代には普通に生息していたが, 三根町での1960年の2羽捕獲の記録を最後に絶滅した (川口, 1937; 倉成, 1962a, 1962b)。ほかに兵庫県, 島根県でもかつては生息していた。

(国外) 中国中部からモンゴル北部, アムール, ウスリーまで分布。イベリア半島には別亜種が生息する。

生活史・生態・生息地: 平野部の林の周辺, 屋敷林, 市街地の公園で見られる。数つがいが集まって弱い集団で繁殖する。昆虫・果実・小鳥の雛などを食べる。

(武石)

絶滅危惧 I A 類 (福岡県)

ヒメクロウミツバメ

ミズナギドリ目 ウミツバメ科 Hydrobatidae

学名: *Oceanodroma monorhis* (Swinhoe, 1867)

カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (環境庁), 絶滅危惧種 (水産庁), LR nt (IUCN)

生息状況・危機の状況・選定理由: 繁殖地は日本とその周辺に限られ、日本では現在、京都府冠島属島の杓島と福岡県沖ノ島属島の小屋島で繁殖が確認されている。繁殖可能性のある岩手県三貫島を加えても、その繁殖つがい数は数百つがいと考えられる(水産庁, 1996, 1998b)。小屋島では、1974年に391羽の成鳥が推定されたが(環境庁, 1975)、1987年にドブネズミの侵入・捕食により、成鳥304羽が死亡したと推定された。これは小屋島の繁殖個体群をほぼ壊滅させるものであった(武石, 1987)。ネズミはその後駆除され、個体数は徐々に回復に向かい、1997年8月の調査時には、77羽の成鳥を捕獲し放鳥した。しかし、沖ノ島ではクマネズミとドブネズミが生息しており、沖ノ島港の改修時の台船の接岸や釣り客の上陸などが見られることから、再びネズミ類が侵入する危険が常にある。繁殖数が少ない段階で

のネズミ類の侵入は、同島の個体群を絶滅させる可能性が高い。

分類・形態: 全長19~20cm。成鳥は全身黒褐色で尾は浅い燕尾。桐原ら(2000)参照。

分布: (県内) 小屋島で繁殖する。

(県外) 杓島で繁殖する。三貫島, 青森県尻矢崎, 島根県隠岐で繁殖記録がある。

(国外) ロシアのウラジオストック沖の島で約7500つがい繁殖する。インド洋北部で越冬する。

生活史・生態・生息地: 小屋島では、ヒゲスゲの密生した草地の中の岩のすき間で繁殖する。7月中旬~8月下旬には、抱卵・抱雛交替や給餌などのため夜間に成鳥が島に出入りする。

法令などの指定状況: 文化財保護法(地域指定の天然記念物)

(武石)

絶滅危惧 I A 類 (福岡県)

カラシラサギ

コウノトリ目 サギ科 Ardeidae

学名: *Egretta eulophotes* (Swinhoe, 1860)

カテゴリー: 情報不足 (環境庁), EN (IUCN)

生息状況・危機の状況・選定理由: 世界の総生息数は約1000つがいと考えられ(del Hoyo et al., 1992)、世界の白サギ類中で最も危険な状態にある。19世紀に盛んであった輸出用の飾り羽の採取目的による狩猟と生息環境の悪化により減少したという。日本ではまれな旅鳥とされるが、県内の干潟では毎年数羽が確認されており、国内では最も出現頻度の多い地域となっている。そのため、県内の干潟は本種の渡りの中継地として重要である。干潟は、その多くが埋立や後背地の開発が計画されており、生息環境の悪化が懸念される。

分類・形態: 全長65cm。全身白色で夏羽は後頭部に冠羽がある。桐原ら(2000)参照。

分布: (県内) 1970年代の記録としては2度しかないなど、かつてはまれな迷鳥とされていたが、1980年代に入りほぼ毎年記録されるようになり、現在では少数ながらも毎年観察される。主に春(4, 5月)に観察されることが多く秋は少ない。夏(6~8月)に観察されることもあり非繁殖鳥による漂行かもし

れない。北九州市曾根, 福岡市今津, 多々良川, 香椎片男佐海岸, 和白, 雁の巣などに記録がある。

(県外) ほぼ全土に記録はあるが、数は少ない。九州, 沖縄諸島に比較的多い。

(国外) 朝鮮半島で繁殖し、一部は中国南東沿岸でも繁殖するという。朝鮮民主主義人民共和国西岸で約500つがい, 韓国で429巣が確認されている(del Hoyo et al., 1992)。越冬地はフィリピンから、ボルネオ, マレー半島, セレベス, スマトラなど。1991年4月フィリピンのボホール州で635羽を数えたが、更に南で越冬した可能性もある(斉藤, 1995)。

生活史・生態・生息地: 干潟, 河口, 後背地の水田で観察される。主に海岸, 河口の浅い水辺で小魚, エビ, カニなどを追いかけ捕食する。翼を半開きにして走るように餌を追う独特の行動が見られる。単独で観察される事もあるが、ダイサギやコサギなどと一緒にいることも多い。

(山根)

絶滅危惧 I A 類 (福岡県)

クロツラヘラサギ

コウノトリ目 トキ科 Threskiornithidae

学名: *Platalea minor* Temminck & Schlegel, 1849

カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (環境庁), 絶滅危惧種 (水産庁), CR (IUCN)

生息状況・危機の状況・選定理由: 総個体数は550羽とされ (Rose & Scott, 1997), 世界で最も絶滅の危機に瀕する鳥の一種である。県内では福岡市瑞梅寺川河口で群れが越冬する。同地は世界的にみて非常に重要な越冬地である。同河口で河川改修やしゅんせつが行われると、ねぐらである中州が消失する可能性があり、本種の越冬に重大な影響がある。また付近に大学移転計画があり、それに伴う周辺環境の改変や道路整備などによる生息環境の悪化が懸念される。

分類・形態: 全長74cm。全身白色で首と足は長い。嘴は黒くて長いしゃもじ型。桐原ら (2000) 参照。

分布: (県内) 1980年代前半まではまれな冬鳥として数例の観察記録があった。1984~85年の冬から瑞梅寺川河口でほぼ毎年越冬するようになった。越冬数は年々増加している。また95年からは博多湾東部の埋立地でも毎冬渡来するようになり、瑞梅寺川河口との行き来が見られる。前原市泉川河口、津屋崎

町末広、北九州市曾根干潟、大和町大和干拓、柳川市筑後川河口などでも記録がある。

(県外) 定期的な越冬地として知られているのは、博多湾、鹿児島県万之瀬川河口、熊本県氷川の3カ所で、いずれも20羽以上が越冬する。その他の地域ではまれな冬鳥として干潟や河口で記録される。

(国外) 繁殖地は朝鮮半島西海岸に限られる。中国南部、香港、ベトナム、台湾、朝鮮半島南部で越冬する。

生活史・生態・生息地: 瑞梅寺川河口には10月中旬~11月上旬に飛来する。行動は潮汐に影響され、満潮時に休息し干潮時に採餌を行う。干潟のみお筋で採餌を行い、しゃもじ型の嘴を水中で左右に振りながら、魚類、甲殻類、貝類を捕食する。3月に入ると成鳥から渡去を始め、5月にはすべての個体が飛び去る。

(岡部)

絶滅危惧 I A 類 (福岡県)

クマタカ

タカ目 タカ科 Accipitridae

学名: *Spizaetus nipalensis orientalis* Temminck & Schlegel, 1844

カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (環境庁)

生息状況・危機の状況・選定理由: 英彦山で繁殖記録があるほか、江川ダム周辺で数つがいが繁殖期に記録されている。県内では、個体数がもともと少ないうえ、森林の伐採により生息・繁殖環境が消失している。英彦山では、繁殖地周辺まで開発が進んでおり、これ以上開発が進めば生息が脅かされる。また飼育を目的とした捕獲、剥製を目的とした捕殺にもさらされている。現在、県内では10つがい以下しか確認されておらず、上記2カ所以外では確認されていないため保全が急務である。

分類・形態: 全長雄約70~雌約83cm。翼開張雄140~雌165cm。森岡ら (1995) 参照のこと。

分布: (県内) 英彦山で繁殖し、江川ダム周辺で繁殖期に記録がある。秋の渡り期には北九州市風師山でハチクマの渡り群中にまれに見られる。また北九州市頂吉、沼林道でも移動中と思われる個体の記録がある。

(県外) 北海道、本州、四国、九州の山地で繁殖し、周年同一地域に生息し、繁殖している。佐渡、隠岐、対馬でも記録がある。

(国外) 種全体としては、ヒマラヤ地方から中国南部にかけてとインド南部・スリランカに分布。日本産亜種は朝鮮半島に分布し、中国北東部でも記録がある。

生活史・生態・生息地: 英彦山では、12月下旬から営巣地上空でディスプレイ飛行を始める。1月中旬には巣作りを開始し、3月上旬には普通1卵を産卵する。ノウサギ、テン、ヒミズ、アナグマ、タヌキなどの哺乳類、ヤマドリ、コジュケイ、キジバト、アオバト、ヒヨドリ、カケスなどの鳥類、アオダイショウ、シマヘビなどの爬虫類を捕食する。

法令などの指定状況: 種の保存法 (国内希少野生動物種)

(小副川)

絶滅危惧 I A 類 (福岡県)

カラフトアオアシシギ

チドリ目 シギ科 Scolopacidae

学名: *Tringa guttifer* (Nordmann, 1835)

カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (環境庁), EN (IUCN)

生息状況・危機の状況・選定理由: 総個体数は数百から多くて1000羽程度と見られ (del Hoyo et al., 1996), 繁殖地, 越冬地ともに局地的で, 世界のシギ, チドリ類中で最も危険な状態にある。県内には, ほぼ毎年春秋に, ほとんど1羽, 時に小群で現れる。

分類・形態: 全長31cm。アオアシシギより足は短く黄色味がある。嘴は太く, わずかに上方へ湾曲し, 基部側と先端側で色の濃淡がはっきり分かれる。下雨覆と脇羽が白く飛ぶと目立つ。桐原ら (2000) 参照。

分布: (県内) 北九州市曾根や福岡市今津, 室見川河口, 多々良川河口, 和白, 雁の巣, 大和町大和干拓などに記録があるが, 近年は曾根と今津で観察される事が多い。秋 (9~11月) に幼鳥が観察されることが多く, 春の記録は少ない (例えば1976年5月13日今津1羽, 1980年5月25日和白1羽, 1990年5月31日今津1羽, 1995年5月28日和白1羽など)。

(県外) 全国的に記録はあるが恒常的に毎年記録されるシギ, チドリ類の中で最も少なく, 秋に幼鳥が

観察されるのがほとんど。春の記録は特に少ない。

(国外) 確実な繁殖地はサハリン北部に限られる。ロシア沿海州やカムチャツカ半島で少数が繁殖期に採集, 観察されている。主な越冬地はバングラデシュと考えられ, 1988年に総計300羽が数えられている (del Hoyo et al., 1996)。タイから中国南部にかけてと, スマトラ島東部などでも越冬するという。

生活史・生態・生息地: 県内では春秋に干潟, 河口, 水田, ハス田などで観察される。繁殖地では低地のカラマツ湿潤林でカラマツの枝上に小枝を組んで巣を造る。繁殖地では主にトミヨなどの小魚を捕えるというが, 博多湾でもソリハシシギのように走り回って小ガニなどもよく捕え食べる。またチュウシャクシギのくわえたカニを横取りするのを観察したことがあり, ほかのシギ類には見られない行動である。**法令などの指定状況:** 種の保存法 (国内希少野生動物植物種)

(山根)

絶滅危惧 I A 類 (福岡県)

カンムリウミスズメ

チドリ目 ウミスズメ科 Alcidae

学名: *Synthliboramphus wumizusume* (Temminck, 1835)

カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (環境庁), 絶滅危惧種 (水産庁), VU (IUCN)

生息状況・危機の状況・選定理由: 日本近海のみが生息し, その総個体数は5000~6000羽と推定される (水産庁, 1996, 1998b)。県内では沖ノ島属島の小屋島で, 1970年代に282羽~408羽の成鳥数が推定された。しかし1987年に, ドブネズミの侵入・捕食があり, 死亡成鳥数は414羽と推定された (武石, 1987)。ネズミ駆除後, 1989年には4巣7卵が発見され, 少数ながら繁殖が確認された。その後, 数はほとんどふえておらず, 10つがいを超えていないのではないかと考えられる。沖ノ島ではクマネズミとドブネズミが生息しており, 沖ノ島港の改修時の台船の接岸や釣り客の上陸など, 再びネズミ類が侵入する危険が常にある。繁殖数が少ない段階でのネズミ類の侵入は, 繁殖個体群を絶滅させる可能性が高い。志摩町烏帽子島では1991年に初めて本種の繁殖が確認され, 約30つがい繁殖するものと推定されている (永田, 1991)。

分類・形態: 全長24cm。背面全体黒灰色で, 成鳥夏

羽は頭部に冠羽がある。桐原ら (2000) 参照。

分布: (県内) 小屋島および烏帽子島で繁殖する。その他玄界灘の沿岸域などの記録があるが多くない。

(県外) 宮崎県枇榔島, 伊豆諸島のいくつかの島, 三重県耳穴島などで繁殖する。繁殖後は択捉島から沖縄までの日本周辺の洋上で生活する。

(国外) 朝鮮半島南部の離礁や離島でも繁殖する。**生活史・生態・生息地:** 小屋島では, ヒゲスゲの密生した草地の中で, ヒゲスゲの葉が覆いかぶさった根元付近や, 岩のすき間で3月から5月に繁殖する。1巣当たり2卵を産み, 孵化後の雛は1~2日で巣立ちする。烏帽子島では, 灯台に登る道沿いに作られた石垣のすき間で繁殖する。

法令などの指定状況: 文化財保護法 (種指定の天然記念物)

(武石)

絶滅危惧 I B 類 (福岡県)

チュウヒ

タカ目 タカ科 Accipitridae

学名: *Circus spilonotus spilonotus* Kaup, 1847

カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (環境庁)

生息状況・危機の状況・選定理由: 県内では冬鳥として埋立地や干拓地に渡来する。北九州市響灘埋立地では2~5羽のねぐら利用を確認している。しかし、1990年代に入ると、埋立地の土地利用が進み、ヨシ群落や草原などが急激に狭くなり、渡来数の減少が見られる。またほかの地域でも渡来数は減少しており、定期的な渡来地は響灘埋立地と苅田町松山埋立地周辺だけである。県内における生息地は、人工的に造成された広大な土地に拮がる一時的な自然環境に片寄っていて生息地が人為的影響を受けやすい。**分類・形態:** 全長雄48~雌約58cm。翼開張雄約113~雌約137cm。森岡ら (1995) 参照のこと。**分布:** (県内) 響灘埋立地や松山埋立地に渡来数が多い。博多湾や大和町大和干拓でも記録がある。しかし近年記録は激減している。

(県外) 日本には冬鳥として渡来するが、北海道、青森県、秋田県、石川県で少数の繁殖が確認されて

いる。越冬地として岡山県笠岡干拓、山口県阿知須干拓、鹿児島県出水市など干拓地や埋立地が多い。

(国外) シベリア東部、モンゴル、中国東北部で繁殖し、中国東南部、東南アジアで越冬する。

生活史・生態・生息地: 本県には9月上旬~10月上旬に渡来し、翌年の3月中旬~4月上旬まで観察される。冬季には個体数の増減があり、個体の入れ替わりも見られる。広いヨシ群落や草原、農耕地などの水辺に生息する。ゆっくりとした羽ばたきと滑空を繰り返して、低空を飛びながら獲物を探し、見つけると素早く降りて捕獲する。獲物はネズミ、鳥類、ヘビ、カエル、昆虫類である。夜はヨシ群落もしくは草原をねぐらに利用する。ねぐらはヨシや草を楕円形に踏み倒したくぼみで、大きさは平均で約60×90cmである。

(林)

絶滅危惧 I B 類 (福岡県)

ヘラシギ

チドリ目 シギ科 Scolopacidae

学名: *Eurynorhynchus pygmeus* (Linnaeus, 1758)

カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (環境庁), VU (IUCN)

生息状況・危機の状況・選定理由: 世界の総個体数が2000~2800つがいと推定される世界的希少種である (del Hoyo et al., 1996)。県内では春・秋に渡来しおおむね毎年観察されるが数は少ない。9, 10月に幼鳥が1羽、あるいは3, 4羽ぐらいまでの小群で観察されることが多く、4, 5月にはまれである。

分類・形態: 全長15cm。へら状の嘴をもつ小型のシギ。桐原ら (2000) 参照。

分布: (県内) 北九州市曾根干潟、福岡市今津、博多湾東部海域などで記録がある。埋立地にもよく入るが、近年博多湾東部海域では、秋に小型のシギ、チドリ類が埋立地に集中する傾向が強くなり、自然環境で観察されることが少なくなっている。冬季の観察例もある。春の記録として、福岡市では1979年5月17日多々良川1羽、1991年5月19日今津1羽、1997年4月12日香椎御島1羽など、秋の多い記録として1977年9月15日室見川8羽などがある。また1983年北九州

市響灘埋立地1羽の記録がある。

(県外) ほぼ全国的に記録があり、毎年観察されているが数は少ない。秋に幼鳥が1羽から小群で観察されることが多く春の記録はまれである。

(国外) シベリア北東部のチュコト半島、一部はカムチャツカ半島のツンドラ地帯で繁殖し、冬はインド東岸より中国南部にかけての東南アジアで越冬する。まとまった群れが見られるのはバングラデシュのみ (1989年ベンガル湾上の島で257羽など) で、ほかではまれで詳しい越冬状況はわかっていない。

生活史・生態・生息地: トウネンとともにいることが多く、干潟、砂浜の波打ち際、水田、ハス田で観察される。独特の嘴は、ヘラサギのように左右に振って小動物を探し出すのに使われ、カモ類のように水面上の餌を濾しとるように使われるのではない。

(山根)

絶滅危惧 I B 類 (福岡県)

ズグロカモメ

チドリ目 カモメ科 Laridae

学名: *Larus saundersi* (Swinhoe, 1871)

カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (環境庁), 絶滅危惧種 (水産庁), EN (IUCN)

生息状況・危機の状況・選定理由: 泥質干潟と塩生湿地での生活に特殊化したカモメ類で、アジア極東部に分布域が限られる。世界の繁殖成鳥総数は約5000羽と推定される。最大の繁殖地である中国遼寧省双台子河河口では、1999年の繁殖期には、同地で繁殖する成鳥総数2323羽の85% (1981羽) が、堤防で閉め切られた内側の塩生湿地で繁殖していた。その場所のごく近い将来にエビ養殖場やパルプ原料用のヨシ生産場などになる予定であり、繁殖場所の喪失の危険にさらされている。越冬地の日本では、最大の渡来地であった諫早湾干潟は干拓工事によって消滅した。また福岡県内の干潟でも、埋立や環境悪化が懸念されている。このように、本種は世界的な規模で種の存続が非常に危ぶまれている。

分類・形態: 全長29~32cm。成鳥頭部は冬羽で白く夏羽で黒い。氏原ら (1992) 参照。

分布: (県内) 北九州市曾根干潟では250羽前後、福岡市和白干潟では約10羽、福岡市瑞梅寺川河口では約30羽が越冬する。

(県外) 主に九州、四国、沖縄の干潟で1000~1500羽が越冬する (1993年度~1998年度WWF調査)。

(国外) 中国の渤海、黄海沿岸および朝鮮半島西部沿岸で繁殖し、中国南部、台湾、朝鮮半島、日本、ベトナムの沿岸で越冬する。双台子河河口で標識された雛は、福岡、長崎、佐賀、熊本、大分、宮崎、愛媛、徳島、島根の各県および韓国忠清南道に渡来・越冬した。

生活史・生態・生息地: 繁殖期は4月中旬~7月上旬で、泥質干潟に面した塩生植物群落が斑状に生えた場所に造巣し1巣3卵を産む。10月中旬~下旬には繁殖地から渡去する。日本の越冬地、例えば曾根干潟では、10月中旬に渡来が始まり、12月中旬から3月上旬まではほぼ安定した数を維持するが、その後渡去が始まり4月上旬までにはほとんどが飛び去る。日中の干潮時に、泥質干潟に急降下して、着地寸前にカニ・ゴカイなどを捕獲する。満潮時には水面上や砂州などで休息する。夜は海上でねぐらをとる。
(武石)

絶滅危惧 I B 類 (福岡県)

コノハズク

フクロウ目 フクロウ科 Strigidae

学名: *Otus scops japonicus* Temminck & Schlegel, 1844

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 英彦山では毎年繁殖期に複数の鳴き声が確認される。福岡地域では繁殖期の確認例はないが、小呂島では春に渡り途中のものが記録される。英彦山では1991年の19号台風により大木がかなり失われ、営巣地の減少が懸念される。県内で繁殖地として考えられる所は現在英彦山のみであるので、周辺の保全が必要である。

分類・形態: 全長18.5~21.5cm。スズメより大きくヒヨドリより小さい。日本のフクロウ科の中で一番小さい。黒褐色のものと赤味の強い褐色のものがおり、両タイプとも全身に不規則で複雑な細かい模様がある。耳のように見える羽角があり、眼の虹彩は黄色。足指に羽毛がない。

分布: (県内) 英彦山、小呂島で記録がある。

(県外) 夏鳥として渡来し繁殖する。九州では少ない。

(国外) ユーラシア大陸南半、アフリカ、インドなどに分布し、温帯地方で繁殖するものは、熱帯地方へ移動し越冬する。

生活史・生態・生息地: 東北地方北部や北海道では平地から山地にすむが、九州では山地の林などにすみ、主に樹洞に営巣する。英彦山では5月初旬に渡来し、高く澄んだ「仏法僧」と聞きとれる声で繰り返し鳴く。日中はよく茂った樹上で眠っていて、人が近づくと細目を開けたりする。夜行性で、夕方になると活動をはじめ、主に昆虫類を捕食する。薄暗い林の中では昼間鳴くこともある。

(小副川)

絶滅危惧 I B 類 (福岡県)

ブッポウソウ

ブッポウソウ目 ブッポウソウ科 Coraciidae

学名: *Eurystomus orientalis calonyx* Sharpe, 1890

カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (環境庁)

生息状況・危機の状況・選定理由: 福岡市油山、立花山で繁殖期の観察例があったが、近年の観察例はない。甘木市で1960年代に、黒木町で1980年代に繁殖例がある。また矢部村日向神ダムでは、1980年代から繁殖が確認されていたが、最近3年間は記録がない。英彦山においても、例年繁殖が確認されていたが、1991年の19号台風で毎年営巣に利用していたスギの大木が倒壊してから、数例の観察例はあるものの繁殖記録はない。このように、現在県内に確実な繁殖地域はないものと考えられ、生息数が激減している。

分類・形態: 全長28~30cm。キジバトよりやや小さい。頭は大きくて平たく、嘴はやや大きめで、先がややかぎ形に曲がり赤い色である。足も赤色である。全身光沢のある濃緑色で頭部は黒い。角度や距離によっては黒色か紫色に見え、遠くから見ると黒い鳥のように見える。飛翔時に翼の先に白斑が目立つ。

分布: (県内) 福岡市油山、立花山、甘木市、黒木町、矢部村、添田町で記録がある。

(県外) 本州、四国、九州に夏鳥として渡来し繁殖するが局地的で、兵庫、鳥取、岡山、広島など中国地方の各県での観察が多い。北海道でも夏季の観察例がある。

(国外) アジア東部からオーストラリアで繁殖する。

生活史・生態・生息地: 主にスギ、ヒノキなど針葉樹の古木の樹洞に営巣し、橋、ダムの排水口、巣箱などの人工物にも営巣する。枯れ枝の先など見晴らしのよい場所にとまって、大型昆虫が飛んでくると飛び立って、空中で捕らえる。

法令などの指定状況: 文化財保護法 (地域指定の天然記念物)、福岡県文化財保護条例 (県天然記念物「英彦山のぶっぼうそう」)

(小副川)

絶滅危惧 I B 類 (福岡県)

ヤイロチョウ

スズメ目 ヤイロチョウ科 Pittidae

学名: *Pitta brachyura nympha* Temminck & Schlegel, 1850

カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (環境庁), VU (IUCN)

生息状況・危機の状況・選定理由: 県内では夏鳥として渡来するが生息数は少ない。県内分布については十分な調査がされていないため、まだ知られていない生息地がかなりあると思われる。生息環境である沢沿いの山林は、ダムや林道の開発、伐採などによる悪影響が考えられる。国内での繁殖地は局地的であり、世界的にも個体数の少ない種である。

分類・形態: 全長18cm。頭は大きくて頸は短く、嘴は太い。足は比較的長く、尾は短い。羽色は緑、コバルト、赤、黄色、黒、茶色と多彩で美しく名前の由来となっている。「ポピィ、ポピィ」と大きな声で鳴く。

分布: (県内) これまで知られている渡来地は、福岡市脊振山系、油山、英彦山などである。

(県外) 本州、四国、九州に夏鳥として渡来するが、

局地的。四国や九州南部では比較的個体数が多い。

(国外) 中国南東部、朝鮮半島、カリマンタンで繁殖し、北の地域で繁殖するものは東南アジアで越冬する。

生活史・生態・生息地: 夏鳥として山地の沢沿いに渡来する。よく茂った照葉樹林を好むが、植林地でも見られることがある。5月中旬頃からさえずりが聞かれる。さえずりを行う期間は非常に短く、6月には鳴かなくなることもある。巣は急傾斜地の石の上やすき間、地上、樹上などに作られる。地上を歩きながら主にミミズを捕食する。

法令などの指定状況: 種の保存法 (国内希少野生動物種)

(岡部)

絶滅危惧種 I B 類 (福岡県)

ウチヤマセンニュウ

スズメ目 ウグイス科 Sylviidae

学名: *Locustella pleskei* Taczanowski, 1889

カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (環境庁)

生息状況・危機の状況・選定理由: 繁殖分布地が極端に限られ、総個体数はかなり少ないと考えられる。越冬地やそこでの生態はほとんどわかっていない。現状では繁殖環境に限っては深刻な生息地の減少はない。しかし、繁殖地である島嶼へのドブネズミなどの侵入により個体群が減少することもある。総個体数の少なさから種の存続は予断を許さない状況にある。

分類・形態: 全長約17cm。シマセンニュウによく似るがやや大きく、嘴と尾羽はより長い。顔には白っぽい眉斑があり、上面はオリーブ褐色、下面は汚れた灰白色。五百沢ら (2000) 参照。

分布: (県内) 福岡市志賀島属島の沖津島、福岡市大机島および小机島、大島村沖ノ島などで繁殖が確認されている。

(県外) 鹿児島県桜島町沖小島が分布の南限であり、ほかに甌列島、日向灘、玄界灘、紀伊半島の熊野灘、伊豆諸島に分布

(国外) 朝鮮半島の島嶼でも繁殖する。冬は中国南部やベトナムで記録がある。

生活史・生態・生息地: 海岸性の照葉樹林や二次林などで繁殖する。県内の繁殖地へは4月下旬頃から雄が渡来し、雌は遅れて5月中旬頃から渡来する。渡来後、雄は丈の高い草本などにとまり頻繁にさえずる。さえずりはレパートリーが多く、シマセンニュウに似るがやや短い傾向がある。大部分は一夫一妻制で繁殖するが、一夫多妻制での繁殖もまれに起こる。低木や笹藪など樹上の込み合った細い枝に椀型の巣を造る。林縁部の地表や下層部で主に昆虫類などの無脊椎動物を食べる。繁殖回数は年1回が普通。一腹卵数は2~5卵。抱卵日数は13~14日、孵化後約2週間で巣立つ。巣立ち後も約2週間前後は親からの給餌を受ける。繁殖を終えた個体から次第に渡去し、9月上旬頃には全ての個体が渡去する。繁殖地以外で渡り途中に観察されることはまれ。

(増田)

絶滅危惧 II 類 (福岡県)

カンムリカイツブリ

カイツブリ目 カイツブリ科 Podicipedidae

学名: *Podiceps cristatus cristatus* (Linnaeus, 1758)

カテゴリー: 絶滅のおそれのある地域個体群 (環境庁)

生息状況・危機の状況・選定理由: 福岡県では冬鳥として海域や河口、大きな池などに渡来する。生息環境である浅海域は、埋立などにより減少しており、1980年代には福岡市和白干潟前面海域では1000羽を越える群れが越冬していたが、埋立などにより渡来数は100羽以下に激減した。

分類・形態: 全長74cm。日本のカイツブリ類で最も大きい。頸と嘴は長い。暗褐色の頭頂、後頸、背面、脇と、白い顔、前頸のコントラストが明瞭。夏羽では頬に赤橙色の飾り羽が生じる。

分布: (県内) 沿岸域に冬鳥として渡来する。博多湾西部の大原海岸は個体数が多く、600羽以上のこともある。周防灘や洞海湾にも比較的多い。

(県外) 青森県で繁殖地が知られているほか、近年、琵琶湖や宍道湖でも繁殖例が報告されている。その

他の地域では主に冬鳥として渡来する。

(国外) ユーラシア大陸の温帯地域で広く繁殖し、冬はやや南下する。アフリカ南部、オーストラリアには、それぞれ別の亜種が生息する。

生活史・生態・生息地: 福岡県の海域には10月中旬頃から飛来する。広い水面を好み、小さな池や水路には入らない。1羽から数羽で見られることが多いが、場所によっては大きな群れとなる。特に春先には群れとなることが多い。潜水して主に魚類や甲殻類を捕食する。4月には渡去するが、少数が越夏することもある。県内ではこれまで繁殖例はない。水辺のヨシ群落やマコモの間に浮き巣を作る。雛は孵化するとすぐに巣から離れ、親鳥の背中では保護される。繁殖期は水生昆虫などを捕食すると思われる。

(井上)

絶滅危惧Ⅱ類 (福岡県)

ヨシゴイ

コウノトリ目 サギ科 Ardeidae

学名: *Ixobrychus sinensis sinensis* (Gmelin, 1789)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 福岡県では夏鳥として渡来する。本種はヨシ、マコモ、ガマなどの抽水植物が繁茂する湿地やため池に生息するが、そのような環境は近年著しく減少している。かつては普通に見られる種であったが、近年渡来地や個体数は激減している。全国規模で減少しており、福岡県でも生息数は非常に少ないと考えられる。

分類・形態: 全長37cm。日本のサギ類中最も小さい。全身黄褐色で、風切羽は黒い。雄は頭頂部が黒く、雌や幼鳥は喉から下面にかけて不明瞭な縦斑がある。桐原ら(2000)参照。

分布: (県内) 福岡市瑞梅寺川河口周辺、野多目池、北九州市曾根では記録が多く、繁殖していると考え

られる。その他の地域ではまれ。生息地については十分な調査がされておらず、不明な点が多い。

(県外) 九州以北に夏鳥として渡来する。琉球列島では少数が越冬する。

(国外) 中国東北部～南部、東南アジア、インドに分布し、北のものは冬季南方へ渡る。

生活史・生態・生息地: 夏鳥として5月下旬頃渡来し、ため池、水路、河川敷、湿地のヨシ、マコモ、ガマなどの抽水植物群落の中で生活する。巣は水辺のマコモやヨシの群落の中に作られる。ヨシやハスなどの茎にとまって小魚、ザリガニ、カエル、昆虫類などを捕食する。冬季の観察記録もある。

(岡部)

絶滅危惧Ⅱ類 (福岡県)

ミゾゴイ

コウノトリ目 サギ科 Ardeidae

学名: *Gorsachius goisagi* (Temminck, 1835)

カテゴリー: 準絶滅危惧 (環境庁), VU (IUCN)

生息状況・危機の状況・選定理由: 森林にすみ、生活に不明な点が多い。もともと個体数は少ない。そのうえ、近年、低山の森林開発が進み、個体数は更に減少すると考えられる。福岡市脊振山、油山で繁殖期の観察例があるが、繁殖は確認されていない。矢部村、北九州市上到津では繁殖の記録がある。英彦山では繁殖期に確認されているが、近辺の開発が進んでおり、これ以上の開発が進めば生息域が侵される危険性もある。

分類・形態: 全長49cm。ゴイサギより小さく、嘴は短い。全体に濃い褐色で、頭上は栗色。胸から腹にかけては縦斑が見られる。飛ぶと尾羽の先から足が出て見え、初列風切と次列風切が黒く褐色の縁取りがあることがわかる。幼鳥は成鳥に似るが、頭が黒褐色で頸部に斑が見られる。雨覆の色が淡い。

分布: (県内) 夏鳥として渡来し、繁殖するが少ない。福岡市志賀島、小呂島、新宮町相島などで渡り途中の記録がある。北九州市皿倉山では11月の記録

もある。

(県外) 日本列島の特産種で、夏鳥として渡来し、関東地方、東海地方、近畿地方、四国西部でも繁殖例がある。

(国外) 台湾、香港を通過し、ブルネイ、インドネシア、フィリピンなどで越冬する。

生活史・生態・生息地: 夜行性で、スギの植林やタブノキやスタジイの常緑広葉樹のよく茂った低山帯の暗い林に生息し、昼間、明るい水辺や草原に出てくることはほとんどない。林の中の沢などで、サワガニ、ミミズなどを捕食する。繁殖期にはつがいで行動し、木の枝の上に小枝などを積み重ねて皿型の巣をつくる。4月中旬から6月中旬頃まで「ポーポー」という鳴き声を聞くことができ、産卵期は5～7月、卵数は3～4個、抱卵日数は20～27日ほど。巣立ちまでの日数は34～37日ほどである。警戒時には頸を伸ばした擬態行動が見られる。

(小副川)

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

ツクシガモ

カモ目 カモ科 Anatidae

学名：*Tadorna tadorna* (Linnaeus, 1758)

カテゴリー：絶滅危惧ⅠB類（環境庁）

生息状況・危機の状況・選定理由：北九州市曾根干潟における1976年からの越冬数調査（武下ら，1994）によると，1986年度までは100羽以下であったが，1992年度，1993年度は最大412羽および402羽を記録した。1995年度は735羽と過去最大数を記録した。その後越冬数はほぼ安定している。また県内にも多く渡来している。曾根干潟は，長崎県諫早湾干潟が消滅した現在，我が国最大の越冬地になっているが，開発計画などもあり，その干潟の保全が急務である。**分類・形態**：全長雄56cm，雌51cm。背面から胸部にかけて，たすき状の栗色の美しい大型のカモである。桐原ら（2000）参照。

分布：（県内）周防灘の曾根干潟は定期的渡来地だが，東南部の豊前海には渡来しない。泥干潟が露出する福岡市瑞梅寺川河口，和白干潟およびその沖の建造中の人工島には240羽あまりが渡来し越冬する。（県外）有明海の佐賀県鹿島市新籠海岸，東与賀町

大授揚にも数百羽が越冬する。

（国外）ロシア東部，モンゴル，中国，中近東，東アフリカ，インドに分布し，ヨーロッパ中部の沿岸や，黒海周辺から中国東北部で繁殖する。東アジアには60,000羽が生息すると推定される（Rose and Scott, 1997）。香港や朝鮮半島南部では数千羽単位で越冬する。

生活史・生態・生息地：曾根干潟には11月中旬頃から少数が渡来し，12月下旬から個体数が増加してくる。満潮時には海面に浮遊し，一部は沖に建造中の人工島へ移動する。干潮時は汀線近くで，よちよち歩きをしながら，干潟表面を嘴ですくうようにして，主に小型の貝類やゴカイ類を捕食している。渡去は3月下旬で，この時期になると分散していた群れは一群となって海面に集結する。

（武下）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

トモエガモ

カモ目 カモ科 Anatidae

学名：*Anas formosa* Georgi, 1775

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（環境庁），VU（IUCN）

生息状況・危機の状況・選定理由：県内では場所や年により越冬数が増減する。しかし，県内全域でも総計が100羽を越えることがなく，非常に少ない鳥であるといえる。ほかのカモ類に比べて警戒心が強く，人の近づけない樹木や草で覆われた岸辺で休息し，自然度の高い環境を好む傾向がある。そのため，生息環境の悪化に対して敏感であり，河川改修や池沼の護岸化が進んだ近年ではその渡来数が激減した。また狩猟鳥から除外されているが，ほかのカモ類と誤って撃たれることもあると考えられる。

分類・形態：全長40cm。雄の顔は黄白色・緑・黒の巴形模様。桐原ら（2000）参照。

分布：（県内）福岡市瑞梅寺川河口（近年の最大数は1997年12月中旬40羽），甘木市江川ダム（同1997年1月中旬34羽），寺内ダム（同1994年1月中旬12羽），北九州市頓田貯水池での記録が多い。瑞梅寺川河口では毎年数羽が越冬し，江川ダムや寺内ダムでもほ

ぼ毎年数羽から三十数羽が記録されている。その他，和白干潟，曲淵ダムなどで記録されている。

（県外）冬鳥として日本全国に渡来するが，日本海側で比較的多く見られる。しかし，かつては多かった渡来数も現在は減少している。

（国外）シベリア東部で繁殖し，中国南東部などで越冬する。

生活史・生態・生息地：越冬地では湖沼，川，池などで見られる。寺内ダムや江川ダムには10月下旬～11月上旬に飛来するが，その数は年によりかなり違う。寺内ダムでは十数羽の時は群れでいるときが多く，数が少ない時はコガモと一緒にいることが多い。昼間は安全な水面で休息し，夕方，夜間，早朝などに水辺や水田などで，穀類などの実や葉，水草などのほか，水生昆虫や貝類なども捕食する。

（溝田）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

ハヤブサ

タカ目 ハヤブサ科 Falconidae

学名：*Falco peregrinus japonensis* Gmelin, 1788

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（環境庁）

生息状況・危機の状況・選定理由：県内では留鳥もしくは冬鳥として観察される。1980年代に北九州市白島、響灘埋立地、部崎、風師山、丸山台、大島村大島、福岡市今津、海の中道、志摩町海岸部などで観察記録がある。北九州市曾根では、ほぼ1年中確認されており、2年ごとに若鳥が出現する。本種は剥製や飼育用に密猟の対象となっている。また農薬による土壌汚染のため、捕食する野鳥からの残留農薬の影響も深刻な状況と考えられる。

分類・形態：全長雄約38～雌約51cm。翼開張雄84～雌120cm。森岡ら（1995）参照。

分布：（県内）玄界灘の島で繁殖する。県内の沿岸部ではほぼ周年見られるが、冬季には北の地域から越冬に訪れるものが見られるため、観察記録は多くなる。山地や内陸部では観察記録は少ない。

（県外）北海道から沖縄まで観察記録がある。繁殖は、北海道、本州、四国、九州の海岸や島嶼で確認されている。

（国外）南極圏と大洋上の島の大部分を除き、世界中に分布。繁殖は大きな川沿いや海岸で多く確認されており、砂漠や高山帯での記録がない。北極圏近くの個体は冬季にやや南へ移動する。

生活史・生態・生息地：県内では留鳥として、曾根、響灘埋立地、今津で、ほぼ1年中確認される。また頓田貯水池などでは、冬季に少数の観察記録がある。毎年4月にヒヨドリの渡りに合わせるように、複数の個体が部崎に出現する。繁殖は海岸や島の断崖の岩棚などで行うことが多い。生息環境としては、海岸、河口、農耕地などの開けた所である。木、電柱、高い建築物に止まったり、速いはばたきと、短い滑空をくり返しながら獲物を探す。見つけると、高所より急降下して襲い捕獲する。獲物は鳥類で、オナガガモ、カワラヒワ、カワラバトと多様である。

法令などの指定状況：種の保存法（国内希少野生動物種）

（林）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

ヤマドリ

キジ目 キジ科 Phasianidae

学名：亜種アカヤマドリ *Symaticus soemmerringii soemmerringii* (Temminck, 1830)

カテゴリー：LR nt (IUCN)

生息状況・危機の状況・選定理由：県内各地の山地で見られるが、生息数は少ないものと考えられる。狩猟による捕殺、また狩猟を目的とした放鳥による亜種の混在が懸念される。

分類・形態：本種は5亜種に区分され、北部九州に生息するのは基亜種のアカヤマドリである。全長は雄125cm、雌55cm。雄はほぼニワトリ大であるが、全長の半分以上になる非常に長い尾を持つ。全体に赤褐色であるが、頭から首にかけてが最も濃く見え、眼の周りには赤い皮膚が裸出している。雌はキジの雌と似るが、本種のほうが赤味のある褐色である。
分布：（県内）県内全域の山地に生息するが、確認記録は少なく詳細は不明な点が多い。福岡市春振山地、油山、北九州市皿倉山、喜多久、山田緑地、英彦山、鞍手町六ヶ岳周辺、山田市大法山、矢部村、

星野村などで見られる。大法山では1999年に擬傷行動をする雌のヤマドリが見られたので、繁殖があったものと考えられる。

（県外）日本固有種。本州、四国、九州に分布
生活史・生態・生息地：丘陵から山地のよく茂った林に生息する。主に地上を歩きながら、草の葉や実などを食べる。昆虫類やクモ類などの小動物を食べることもある。驚くと地上から大きな羽音を立てて飛び上がり、斜面を滑翔して逃げる。繁殖期に雄は翼を羽ばたいて、「ほろ打ち」と呼ばれる「ドドド」という音を出す。これは小鳥類のさえぎりに相当すると思われる。繁殖期以外は数羽の群れで行動する。

法令などの指定状況：鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律（狩猟鳥獣）

（小副川）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

ナベヅル

ツル目 ツル科 Gruidae

学名：*Grus monacha* Temminck, 1835

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（環境庁），LR cd（IUCN）

生息状況・危機の状況・選定理由：県内では，10，11月の渡りの時期に群れが上空を通過したり立ち寄ることがある。越冬例もあり，その場合は単独のことが多い。飛来する農耕地は鳥獣保護区となっていない場合が多く，誤射の危険性がある。また越冬するには広い農耕地が必要だが，宅地や工場用地などの造成により，まとまった面積の農耕地が減少しつつある。本県は渡りのルート上に位置し，越冬地の要件を満たす農耕地もあり，過密状態の鹿児島県出水からの分散地としての可能性があることなど重要な位置を占めている。

分類・形態：全長96.5cm。頭部と頸は白く，体は灰黒色。頭頂は赤い皮膚が露出しており，額は黒い。嘴は黄色で，足は黒色。「クルル」と大きく響く声で鳴く。

分布：（県内）福岡市瑞梅寺川河口周辺，北九州市曾根，津屋崎町末広などに記録がある。

（県外）鹿児島県出水水平野に約8000羽が渡来し世界最大の越冬地となっている。山口県熊毛町，高知県中村市に少数が毎年越冬する。ほかの地域ではまれ。

（国外）シベリア東南部，中国東北部で繁殖し，中国揚子江周辺，韓国で越冬する。

生活史・生態・生息地：広い農耕地に渡来する。イネ科植物の種子やイネの二番穂などを捕食する。越冬地では，家族群は親鳥2羽と幼鳥2羽または1羽で行動する。

法令などの指定状況：種の保存法（国際希少野生動植物種），文化財保護法（地域指定の特別天然記念物）

（岡部）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

マナヅル

ツル目 ツル科 Gruidae

学名：*Grus vipio* Pallas, 1811

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（環境庁），VU（IUCN）

生息状況・危機の状況・選定理由：県内では，10，11月および2月の渡りの時期に，群れが上空を通過したり立ち寄ることがある。越冬例もあり，その場合は単独のことが多い。飛来する農耕地は鳥獣保護区となっていない場合が多く，誤射の危険性がある。また越冬するには広い農耕地が必要だが，宅地や工場用地などの造成により，まとまった面積の農耕地が減少しつつある。本県は渡りのルート上に位置し，越冬地の要件を満たす農耕地もあり，過密状態の鹿児島県出水からの分散地としての可能性があることなど重要な位置を占めている。

分類・形態：全長127cm。大型のツル類。頭部から頸は白く，頸の下部前側から胸，腹，背中は暗青灰色で，雨覆と三列風切は淡青灰色。顔は赤く皮膚が露出している。嘴は黄色で，足は淡紅色。「クルル」と大きく響く声で鳴く。

分布：（県内）福岡市瑞梅寺川河口，海の中道，前原市加布里，北九州市曾根などに記録がある。

（県外）鹿児島県出水水平野には約2000羽が渡来し世界有数の越冬地となっているがほかの地域ではまれ。

（国外）シベリア東南部，モンゴル東部，中国東北部で繁殖し中国揚子江周辺，韓国で越冬する。

生活史・生態・生息地：広い農耕地に渡来する。イネ科植物の種子やイネの二番穂などを捕食する。越冬地では，家族群は親鳥2羽と幼鳥2羽または1羽で行動する。

法令などの指定状況：種の保存法（国際希少野生動植物種），文化財保護法（地域指定の特別天然記念物）

（岡部）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

イカルチドリ

チドリ目 チドリ科 Charadriidae

学名：*Charadrius placidus japonicus* Mishima, 1956

カテゴリー：LR nt (IUCN)

生息状況・危機の状況・選定理由：福岡市室見川、多々良川の中流域で主に冬に観察される。しかし、大任町彦山川などでは繁殖の記録もあり、周年生息しているものと思われる。繁殖場所が川原や中州であるために、河川の増水による営巣地の水没や、河川工事による繁殖状況の悪化、または営巣地の破壊などが懸念される。近年、観察例が少ないことから、個体数が減少しているものと考えられる。

分類・形態：全長20.5cm。スズメより大きく、ほぼムクドリ大の大きさである。コチドリやシロチドリと比べると大きく嘴が長い。また顔、頭の模様もこれらチドリ類ほどはっきりしていない。足は薄い黄色か肌色。頭、背中、翼は灰褐色で、額から眼にかけてと頭のあたりに黒い横帯があるが、それ以外の顔や腹は白い。桐原ら（2000）参照。

分布：（県内）福岡市室見川、多々良川、大任町で記録がある。犀川町祓川と今川で繁殖期に成鳥2羽の記録があるが、繁殖の確証はない。

（県外）本州から九州までの各地で繁殖している。

（国外）極東アジア北部からアムール川に至る地域で繁殖し、極東南部や東南アジア北部で越冬する。

生活史・生態・生息地：冬は水田にも見られるが、主に河川の中流より上の中州や川原に生息し、川の下流や河口、海岸ではほとんど見られない。昆虫などの小動物を餌とする。砂礫地の地上に営巣し、つがいになわばりをもつ。雛は孵化するとまもなく巣を離れ、親鳥について歩く。敵が近づくと親鳥は擬傷を行う。

（小副川）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

ウズラシギ

チドリ目 シギ科 Scolopacidae

学名：*Calidris acuminata* (Horsfield, 1821)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：福岡市瑞梅寺川河口周辺の水田では、春に数十羽の群れがよく見られたが、近年は10羽を越える群れが見られることはほとんどなくなった。生息環境である水田やハス田の減少が渡来数減少の一因であるが、まだ水田やハス田が残っている地域でも減少しているので、農薬などによる餌生物の減少なども考えられる。また繁殖地や越冬地、渡りの中継地など世界規模での淡水湿地の減少や環境悪化が、本種を含む淡水湿地性の鳥類の減少の原因となっている。

分類・形態：全長22cm。嘴、足が長いスマートなシギ。頭頂、背中、翼の上面は灰黒褐色で、肩羽や雨覆には白い羽縁がある。顔から下面にかけては白色で、顔、胸、脇には黒褐色の縦斑がある。上尾筒は白く、飛ぶと目立つ。足は黄色。

分布：（県内）平地の水田やハス田に渡来する。比較的個体数が多いのは、瑞梅寺川河口周辺、大和町大和干拓など。

（県外）日本には旅鳥として、全国各地に渡来する。

（国外）シベリア東部の極北地域で繁殖し、オーストラリア、ニュージーランド、ニューギニアなどで越冬する。

生活史・生態・生息地：本種は淡水の湿地を好み、県内では主に水田やハス田などで見られることが多い。干潟や海岸で見られるのはまれ。旅鳥として渡来するが、春のほうが渡来数が多い。春は4月～5月、秋は8月～10月に見られる。湿地を歩きながら嘴を泥に浅く入れ、昆虫類の幼虫などを捕食する。

（岡部）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

タカブシギ

チドリ目 シギ科 Scolopacidae

学名：*Tringa glareola* Linnaeus, 1758

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：県内ではかつて淡水湿地性のシギとして最も普通種であり、渡来数も多かったが、近年渡来数は減少している。生息環境である水田やハス田の減少が渡来数減少の一因であるが、まだ水田やハス田が残っている地域でも減少しているため、農薬などによる餌生物の減少なども考えられる。また繁殖地や越冬地、渡りの中継地など世界規模での淡水湿地の減少や環境悪化が、本種を含む淡水湿地性の鳥類の減少の原因となっている。

分類・形態：全長22cm。嘴、足が長いスマートなシギ。上尾筒は白く、飛ぶと目立つ。足は黄色。桐原ら（2000）参照。

分布：（県内）水田やハス田に渡来する。個体数が

多いのは、福岡市瑞梅寺川河口周辺、大和町大和干拓地内水田など。

（県外）日本には旅鳥として、全国各地に渡来する。越冬記録もある。

（国外）ユーラシア大陸の亜寒帯地域以北で広く繁殖し、冬はアフリカ、インド、東南アジア、オーストラリアなどで越冬する。

生活史・生態・生息地：本種は淡水の湿地を好み、県内では主に水田やハス田などで見られることが多い。干潟や海岸で見られるのはまれ。旅鳥として渡来し、春は4月～5月、秋は8月～10月に見られる。冬季の記録もあるが、まれである。湿地を歩きながら嘴を泥に浅く入れ、昆虫類の幼虫などを捕食する。

（岡部）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

ダイシャクシギ

チドリ目 シギ科 Scolopacidae

学名：*Numenius arquata orientalis* Brehm, 1831

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：県内には冬鳥として渡来する。本種の越冬する干潟は全国的にみても少なく、そのほとんどが数羽である。100羽以上が渡来するのは、長崎県諫早湾干潟と北九州市曾根干潟の2カ所のみであった。しかし、最大の渡来地であった諫早湾干潟は、干拓事業による潮受堤防の閉め切り後に消滅したため、そこを利用していた個体群は、佐賀県大掬の干潟に移動した。曾根干潟では毎年120羽前後が越冬し、本種の国内2番目の越冬地となっている。本種が渡来する県内の干潟は、いずれも埋立や環境悪化が懸念され、その越冬環境は安泰とはいえない状態にある。大規模な越冬地は国内には本県と佐賀県にしかなく、県内の越冬地は本種の存続にとって非常に重要な地位を占めている。

分類・形態：全長60cm。長くて下に曲がった嘴を持つ大型のシギ類。全身淡褐色で、暗褐色の縦斑がある。下尾筒、腰、上尾筒は白。「カーリユー」と

大きな声で鳴く。桐原ら（2000）参照。

分布：（県内）毎年越冬するのは曾根干潟と福岡市和白干潟の2カ所のみ。福岡市瑞梅寺川河口では年により越冬する。その他の地域ではまれである。

（県外）全国の干潟に冬鳥または旅鳥として渡来する。

（国外）ユーラシア大陸北部で繁殖し、中国南部、東南アジア、インド、アフリカで越冬する。

生活史・生態・生息地：曾根干潟で越冬するものは11月頃から渡来し、4月まで見られる。干潟域に生息しカニ類を好む。長い嘴を干潟に突っ込んで、ヤマトオサガニなどのカニ類や貝類などを捕食する。満潮時には冠水しない場所で休息するが、曾根干潟では大潮などの潮位が高い時にはすべて冠水してしまうため、潮が引いて干潟が現れるまでの間、上空を飛び回っていることがある。

（岡部）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

ホウロクシギ

チドリ目 シギ科 Scolopacidae

学名：*Numenius madagascariensis* (Linnaeus, 1766)

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（環境庁），LR nt (IUCN)

生息状況・危機の状況・選定理由：県内では1980年代中頃まで大和町大和干拓に多数渡来した（例えば1977年3月28日143羽，1984年4月6日180余羽）。同地ではオグロシギ436羽（1974年8月），オオソリハシギ777羽（1975年8月），キアシシギ879羽（1974年8月），オバシギ2910羽（1975年4月），ソリハシギ750羽（1975年8月）なども記録されたが，環境が大きく変わり，現在ではほとんどシギ，チドリが見られない。海外では狩猟圧が高く，生息地の消失，環境悪化が数の減少に追い打ちをかけている。

分類・形態：全長61.5cm。最大級のシギで下に曲がった長い嘴を持つ。桐原ら（2000）参照。

分布：（県内）春（3～5月），秋（8～11月）に北九州市曾根干潟，福岡市今津，多々良川，和白，雁の巣などで観察される。春に多く，曾根干潟で最大50羽前後（武下氏私信），ほかの地域では10～15羽ほど渡来する。秋の渡りでは観察される数が少なく，

曾根干潟ともども10羽を越すのはまれである。

（県外）春秋の旅鳥として全国的に渡来する。しかし，諫早湾干潟の消失以来，50羽を越す渡来地は佐賀県大掬干潟と曾根干潟だけとなった。ほかの渡来地では10羽を越す干潟は少なく，また多くても40羽程度であり，上記2干潟の重要性は高い。

（国外）南はウスリーよりモンゴルにかけ，北はカムチャツカ半島よりバイカル湖の北方までの範囲で，局地的に繁殖する。世界の総個体数は21000羽と推定され（Rose & Scott, 1997），その内19000羽がオーストラリアで越冬するという。

生活史・生態・生息地：干潟，河口で見られ，後背地の田畑にいてもある。ごく少数が越冬することもある。干潟上や浅い水面で長い嘴をさし込んで，ヤマトオサガニなど大型のカニを食す。

（山根）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

ツバメチドリ

チドリ目 ツバメチドリ科 Glareolidae

学名：*Glareola maldivarum* Forster, 1795

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（環境庁）

生息状況・危機の状況・選定理由：日本ではまれな鳥であるが，県内では1974年5月31日大和町大和干拓で成鳥1羽が，8月から9月にかけては成鳥・亜成鳥50羽が確認された。また，同年に高田町三池干拓でも亜成鳥を含む24羽が確認された。1975年6月8日には，大牟田市三百間埋立地で4つがいの繁殖が初めて確認された。一時期の中断（1988～1993年）を経て，1994年から1999年まで筑後川中流域で連続して繁殖が記録されている。田主丸町両筑橋上流の中州での繁殖は，増水による冠水や，流量が少ない時の地続きとなることによるイヌ，キツネ，イタチの害，人間による影響（釣人の立ち入りとラジコン，パラグライダー）があり，繁殖率が落ちている。繁殖期の立入禁止や中州のかさ上げなどの対策が急務である。

分類・形態：全長26.5cm。ツバメとチドリを合わせたような形。桐原ら（2000）参照。

分布：（県内）筑後川中流域で繁殖するほか，北九州市響灘，曾根，福岡市和白，瑞梅寺川河口，矢部川，筑後川河口，大野島などで記録がある。

（県外）繁殖記録として，1975年宮崎県大淀川，小丸川河川敷，1976年愛知県，島根県などがある。

（国外）シベリア東南部，中国北部，モンゴルなどで繁殖し，冬季中国南部，インド，東南アジア，オーストラリアに渡る。

生活史・生態・生息地：埋立地や川原の砂地，砂礫地で繁殖するが局地的である。県内では5月初旬に渡来する。シロチドリ，コチドリ，コアジサシなどと同所的に営巣する。1巣3～4卵で，抱卵期間は17～18日，孵化後23～25日で親を離れる。8月末～9月にかけては，干潟の上空で見かけることが多い。はばたきと滑空を交互にして速く飛びまわり，空中でトンボ，ハエ，アブなどを捕らえて採食する。

（松富士）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

ベニアジサシ

チドリ目 カモメ科 Laridae

学名：*Sterna dougallii bangsi* Mathews, 1912

カテゴリー：準絶滅危惧（環境庁）

生息状況・危機の状況・選定理由：県内では1993年に大牟田市三池島の入気立坑内で4羽が保護されたのが最初の記録である。1994年には、同島で初めて繁殖が確認され、以降毎年繁殖しており、同島が本種の繁殖地の北限となった。しかし、同島では植物相が短茎型から長茎型に遷移しつつあり、繁殖への影響が心配される。また島内に生息しているトビイロシワアリによる雛の死亡も多く、安定した繁殖環境維持のために有効な保護対策の必要がある。更に同島は炭鉱掘削のための入気坑として造られた人工島であり、三池炭鉱が閉山になった現在、同島自体の今後の保全にも多くの課題が残されている。

分類・形態：全長約31cm。下面と尾は白色、背、翼は淡青灰色、嘴と足は赤い。夏羽は額から後頭にかけて黒い。桐原ら（2000）参照。

分布：（県内）大牟田市三池島で繁殖するほか、1996

年6月に福岡市奈多海岸で1例の記録がある。また、北九州市響灘埋立地でも記録がある。

（県外）鹿児島県馬毛島、奄美諸島、沖縄諸島、先島諸島で繁殖する。

（国外）インド洋、太平洋、大西洋の熱帯・亜熱帯で繁殖する。

生活史・生態・生息地：三池島では6月上旬に飛来し8月中旬にかけて繁殖する。個体数は200～500羽が確認されている。巣は草の付け根や小石のある箇所にくぼ地を作って産座とし、産卵数は1～2卵で、営巣数は100巣前後が確認されている。標識調査の結果、1980年に沖縄県名護市で標識された個体が三池島で確認され、16年以上の寿命があることや生後2年目で繁殖することなどが明らかになっている。

（江口）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

コアジサシ

チドリ目 カモメ科 Laridae

学名：*Sterna albifrons sinensis* Gmelin, 1789

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（環境庁）、減少傾向（水産庁）

生息状況・危機の状況・選定理由：夏鳥として渡来し本州以南の河川敷や海浜の砂地、砂礫地でコロニーをつくり、繁殖する。自然環境が豊かな頃には、各地の海岸、河川敷で多くの繁殖が確認されたが、海岸の埋立、造成が進むにつれ、埋立地に営巣するようになり、工事の状況、環境の変化により増減をくり返し、全国的にその数を減らしている。1992年から1996年の県内調査では、14カ所の繁殖地のうち埋立地が10カ所、河川敷、海浜が3カ所、その他が1カ所で、埋立地に大きく依存していた（福岡県1997）。また、1000羽以上のコロニー（北九州市響灘埋立地、苅田町沖人工島、福岡市博多湾東部埋立地）が、翌年には1桁台に激減するなどの変化が見られた。繁殖地の環境悪化、減少により個体数が大きく減少している。

分類・形態：全長28cm。アジサシ類中最小。上面は淡青灰色で下面は白い。桐原ら（2000）参照。

分布：（県内）安定した生息地は三池島である。しかし、三池島では1992年以降、草が繁茂し繁殖に適

した場所が減少しており、またトビイロシワアリにより卵の下半分が土中に埋められ孵化しなかったり、孵化直後の雛が食べられるなどの害が増大しており、安定した繁殖のためには人為的な管理が必要である。ほかに響灘埋立地、博多湾東部埋立地などで繁殖する。

（県外）本州以南、沖縄諸島、先島諸島の各地（特に関西以西に多い）で繁殖が確認されている。

（国外）中国東部で繁殖し、冬季東南アジア、オーストラリアにわたる。

生活史・生態・生息地：我が国には4月中旬～5月に渡来し、海辺や河川に生息する。空中で停止飛翔し、水中に急降下して小魚を捕食する。繁殖期は5月～7月。シロチドリ、コチドリなどとコロニーをつくる。巣は砂地、砂礫地にくぼみをつくり2～3卵を産む。

法令などの指定状況：種の保存法（国際希少野生動物植物種）

（松富士）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

カラスバト

ハト目 ハト科 Columbidae

学名：*Columba janthina janthina* Temminck, 1830

カテゴリー：準絶滅危惧（環境庁），LR nt（IUCN）

生息状況・危機の状況・選定理由：1970年代後半の北九州市白島調査では、ルートセンサスで照葉樹林内で20～30羽を記録していたが、1995年3月には8羽しか記録できなかった。ルートの斜面下の石油備蓄基地の稼働が減少した要因と考えられる。

分類・形態：全長40cm。和名のようにカラスに似た黒色で、頭部や背面には紫や緑の光沢がある。足は薄い赤色。五百沢ら（2000）参照。

分布：（県内）白島、沖ノ島には周年生息する。福岡市玄界島、志摩町姫島、大島村大島でも繁殖が確認されている。北九州市藍島、玄海町地島でも記録があるように島嶼に記録が集中している。

（県外）下関市蓋井島、光市牛島、小笠原諸島、薩南諸島、南西諸島で繁殖する。

（国外）朝鮮半島の一部でも繁殖する。

生活史・生態・生息地：シイやタブなどの木の実を好んで食べる。飛翔時には頭部を立てるようにして

飛ぶが、樹木の梢上低く飛び、高度を上げることはない。林内で「ワオーツワオーツ」と牛のような大きな声で鳴く。藍島では1998年9月から月1回本種の生息調査を継続し、島の北部の狭い照葉樹林で2～6羽を記録したが、5～7月には1羽も記録できなかった。牛島では2月に林床に繁茂するノシランに営巣、繁殖すると報告されているが（山本 1994）、藍島では林床にも注意したが、繁殖は未確認である。藍島の西8kmの白島、北10kmの蓋井島が繁殖地で、非繁殖期に記録されている藍島の本種は、繁殖地と往復している一過性の個体の可能性が高い。白島では地上の巣が確認され、沖ノ島ではオオミズナギドリ

の標識調査の際に、林床に寝ているのが見られたが、両島での本格的な繁殖調査は実施されていない。

法令などの指定状況：文化財保護法（種指定の天然記念物）

（武下）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

アオバズク

フクロウ目 フクロウ科 Strigidae

学名：*Ninox scutulata japonica* (Temminck & Schlegel, 1845)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：県内では社寺林や低山地に夏鳥として渡来する。以前は住宅地や市街地の社寺林などで普通に見られていたが、近年は営巣に必要な大径木の減少や越冬地である東南アジアの環境悪化で渡来数は減少している。県内でもその減少は明らかである。

分類・形態：全長29cm。雌雄ほぼ同色。頭部から背にかけてが黒褐色。喉もとは褐色に白、腹は白く、黒褐色の幅広い縦斑がある。尾羽も黒褐色で数本の白い横斑がある。虹彩は明るい黄色。

分布：（県内）県内各地の神社や大木のある公園に渡来し、山地には少ない。

（県外）全国に夏鳥として4月中旬～5月上旬に渡来し、社寺林や低山地で繁殖する。10月中旬～下旬に渡去し、冬は東南アジア方面で越冬する。一部、九州南部で越冬記録もある。

（国外）旧北区、東洋区。ユーラシア大陸東部のウ

スリーからインド、東南アジアに分布し、北部のものには冬に東南アジアなど南方へ渡って越冬する。

生活史・生態・生息地：県内では4月下旬頃に渡来する。渡来後すぐに雄は巣の周辺や行動圏内で「ホーホー」と力強く鳴く。一夫一妻で、つがいは配偶者が途中でいなくなるとかぎり同じ相手であり、毎年同じ巣を利用することが知られている。昼間は密生する樹葉の間で静止しており、活動は主に夜間である。特に日暮れどきが最も活発で外灯に集まる昆虫類を盛んに捕食する。時に小鳥類やコウモリ類などを捕食することもある。1巣卵数は2～5卵で、雌のみが抱卵し、25日ぐらいで孵化する。雛は白い幼綿羽に覆われており、28日ぐらいで巣立つ。7月下旬～8月上旬には繁殖を終え、10月上旬には越冬地へ渡去する。

（井上）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

ヨタカ

ヨタカ目 ヨタカ科 Caprimulgidae

学名：*Caprimulgus indicus jotaka* Temminck & Schlegel, 1847

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：福岡市脊振山地、油山、海の中道、北九州市山田緑地、英彦山などで繁殖期の観察例があるが、個体数は多くない。ほかに渡りの途中と思われる観察例がいくつかある。声による観察例がほとんどであるが、近年その観察例が減ってきているので、個体数が減少しているものと思われる。しかし、その原因は不明である。

分類・形態：全長28～30cm。全体に灰褐色で複雑な枯れ葉模様がある。尾と翼は長い。嘴は小さいが根元には剛毛があり、飛翔時には大きく開く。雄の尾羽の先端付近には白斑がある。

分布：（県内）英彦山、福岡市脊振山地、油山、海の中道などで記録がある。

（県外）北海道から九州までの各地に夏鳥として渡来し繁殖する。

（国外）アジアの温帯から熱帯で繁殖する。

生活史・生態・生息地：夜行性で夕方から活動し、羽音をたてずに、ひらひらと羽ばたいて飛び回り、空中の昆虫を捕食する。よく街灯に集まるガを捕らえる。日中は体を横枝に平行にしてとまり、体の模様によって木のこぶのように見える。夏鳥として5月中旬に渡来する。繁殖期には夕方や夜明けごろに「キョッキョッキョッキョッキョ・・・」と鳴き続ける。5月から8月にかけて林内や草原の地上に直接産卵する。

（小副川）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

アカショウビン

ブッポウソウ目 カワセミ科 Alcedinidae

学名：*Halcyon coromanda major* (Temminck & Schlegel, 1848)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：県内では渡来する場所が限られていて、繁殖期の観察例がある。繁殖している可能性が高いと思われるが、個体数はごく少ないと思われる。繁殖地の環境が更に悪化すれば、危機的状況に陥る可能性がある。繁殖地周辺の保全が必要である。

分類・形態：全長27～29cm。カワセミより大きくヤマセミより小さい。全体が黄色味を帯びた赤色で、上面の色はやや濃く、翼や背中には紫色を帯びた光沢がある。腰に水色の羽毛がある。嘴は太くて赤く、足も赤い。

分布：（県内）福岡市脊振山地、宮田町千石で繁殖期に確認されている。繁殖の可能性は高いが、毎年渡来しているかどうかは不明である。英彦山では例年繁殖期に記録があるが、繁殖しているかどうかは不明である。

（県外）北海道から九州までの各地に夏鳥として渡来し繁殖する。

（国外）東南アジアから中国にかけて繁殖する。

生活史・生態・生息地：主に溪流沿いのよく茂った落葉広葉樹林に見られる。英彦山では5月上旬から鳴き始めるのでそのころ渡来しているものと思われる。林内や溪流沿いで木の枝にとまり、水面にいる魚や地上にいるカエル、サワガニ、トカゲ、昆虫類などさまざまなものを捕食する。巣は朽ち木に穴を開けたり、樹洞を利用したりする。繁殖期には朝早く、または夕方に「キョロロロロ」と尻下がりの声で鳴く。雨天のときや曇りの日には日中でも鳴くことがある。また渡来してすぐのときは、晴れの日の昼間でも鳴くことがある。

（小副川）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

サンショウクイ

スズメ目 サンショウクイ科 Campephagidae

学名：*Pericrocotus divaricatus divaricatus* (Raffles, 1822)

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（環境庁）

生息状況・危機の状況・選定理由：福岡市油山では、1980年代に繁殖確認例があるが、それ以後はない。近年は油山や脊振山地での観察例は少なく、繁殖していない可能性が高い。また、山田市大法山で夏季に確認されていたが、近年観察例はない。渡りの時期に見られる数も少なくなっている。全国規模での個体数の減少が見られ（環境庁、1999）、越冬地や中継地の環境の変化の影響が示唆されている。
分類・形態：全長20cm。スズメより大きく、ヒヨドリより小さい。色彩はハクセキレイと似ているが、ハクセキレイが体を横にしてとまるのに対して、本種は体を立ててとまる。雄は額、喉、胸から腹にかけては白く、後頭部、過眼線は黒い。背から腰は灰色で、中央尾羽は黒く、外側尾羽は白い。翼は黒い。雌の模様は雄とほぼ同じであるが、全体的に色が淡い。亜種リュウキュウサンショウクイは額の白色部

が狭く、体の上面の黒味が強い。また、胸から脇が灰黒色である。

分布：（県内）福岡市油山、脊振山地、山田市大法山などで記録がある。

（県外）本州以南で繁殖する夏鳥である。九州南部から琉球諸島には留鳥として別の亜種リュウキュウサンショウクイが生息する。

（国外）ウスリーから朝鮮半島にかけて繁殖し、東南アジア各地で越冬する。

生活史・生態・生息地：主に低山、丘陵、平地の広葉樹林を好み、高い木の枝先にとまって、昆虫類やクモ類を捕食する。「ヒリリン」と聞こえる単純なリズムを繰り返してさえずる。5月～6月に産卵期を迎え、高木の横枝の上に樹皮、細枝、コケ類、クモの巣などを利用した巣をつくる。

（小副川）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

サンコウチョウ

スズメ目 カササギヒタキ科 Monarchidae

学名：*Terpsiphona atrocaudata atrocaudata* (Eyton, 1839)

カテゴリー：LR nt (IUCN)

生息状況・危機の状況・選定理由：県内では夏鳥として渡来するが、局地的であり個体数も少ない。宅地造成などで生息地そのものが消滅した例もあり、生息数の減少が懸念される。また、渡りの時期に見られる個体数は、ここ10年でみると著しく減少しており、全国規模での個体数の減少が見られる。越冬地である東南アジアでの森林伐採などの環境悪化が大きく影響しているといわれている。

分類・形態：全長雄44.5cm、雌17.5cm。冠羽があり、頭部、胸はやや紫がかった黒、腹は白、嘴と目の周囲はコバルト色。雄の背は暗い茶褐色で尾は黒くとても長い。雌の背と尾はやや橙がかった茶褐色。

分布：（県内）福岡市油山、志賀島、今宿、北九州市道原、高野、新道寺、山田緑地（毎年繁殖）、皿

倉山、河内、市瀬、英彦山、古処山などで夏鳥として渡来するが少ない。

（県外）本州以南で繁殖する。北海道でまれな確認例がある。

（国外）朝鮮半島、台湾。冬季は中国南部、ベトナム、マレー半島など。

生活史・生態・生息地：福岡県には4月頃渡来する。平地から山地の中腹にかけての主に薄暗い林に生息する。飛翔は木の梢より高い所を飛ぶことはほとんどなく、下枝付近を翼を緩慢に羽ばたいて飛翔する。採餌は主に飛行中に昆虫類をついばむ。5月から7月にかけて産卵する。9月頃渡去する。

（皆合）

準絶滅危惧 (福岡県)

サンカノゴイ

コウノトリ目 サギ科 Ardeidae

学名: *Botaurus stellaris stellaris* (Linnaeus, 1758)

カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (環境庁)

生息状況・危機の状況・選定理由: 県内では繁殖せず、冬季に渡来する。日中はヨシ群落の中に潜んでいる習性のため観察は困難であり、生息状況は不明な点が多い。本種の生息には面積の広いヨシ群落が必要であるが、近年そのようなヨシ群落は減少しており、渡来数は減少していると考えられる。

分類・形態: 全長70cm。大型のサギ類で、ずんぐりしているが、頸を伸ばすと長い。全身黄褐色で、黒褐色の複雑な斑がある。頭頂部は黒い。枯れたヨシ群落の中でじっとしていると、保護色となり発見するのは困難である。

分布: (県内) 福岡市瑞梅寺川河口周辺ではほぼ毎年記録がある。北九州市曾根でも記録がある。

(県外) 北海道、千葉県利根川流域、滋賀県琵琶湖などで局地的に繁殖記録がある。その他の地域では冬鳥として渡来するが、渡来数は少なくまれである。

(国外) ユーラシア大陸の温帯から亜寒帯で広く繁殖し、冬は南下する。

生活史・生態・生息地: ため池や湿地のヨシ、マコモ、ガマなどの抽水植物群落の中で生活する。広大な湿地を好むが、狭いヨシ群落で確認されることもある。非常に警戒心が強く、人の気配を感じると首を伸ばして擬態を行う。擬態が巧妙なため、確認するのは大変困難であり、生息状況は不明な点が多い。ヨシ群落の中で魚類やカエルなどを捕食する。

(岡部)

準絶滅危惧 (福岡県)

チュウサギ

コウノトリ目 サギ科 Ardeidae

学名: *Egretta intermedia intermedia* (Wagler, 1829)

カテゴリー: 準絶滅危惧 (環境庁), 希少種 (水産庁)

生息状況・危機の状況・選定理由: 東日本では生息数のごく少ないとされているが、県内では山間部を除くほぼ全域で、夏鳥として比較的容易に観察できる。干潟や河口、河川にはあまり出現せず、開けた農耕地に好んで生息するが、大きな群れは形成しない。

分類・形態: 全長63~72cm。全身白く足は黒い。嘴は黄色で先端部が黒い。繁殖期には、眼先が顕著な黄色の婚姻色となる。

分布: (県内) 福岡市愛宕山・蒲田、小郡市大原、大牟田市甘木山、鞍手町木月、水巻町頃末に繁殖コロニーが見られる。夏鳥であるが、県内でも年によっては少数が越冬することがある。

(県外) 九州各県、四国、本州で繁殖する。宮崎県や鹿児島県では越冬する。

(国外) 朝鮮半島、中国、東南アジア、オーストラ

リア、インド、アフリカに分布

生活史・生態・生息地: 農耕地で小型の昆虫類や両生類・爬虫類を捕食する。秋から冬にかけて、昼間はあまり混群を形成しないサギ類と、同じねぐらを利用する。北九州市曾根新田には、護岸堤防内のブッシュに小規模ねぐらが存在して、飛来した就峙群は、干潮時に一旦干潟に下りる。通常は干潟を利用しない本種も、この時期はほかの種とともに干潟に下りて、日暮れとともに本ねぐらへ移動する。本種はアオサギよりは遅く、4月下旬にはゴイサギ、アマサギ、ダイサギ、コサギと一緒に巣造りを始め、3~5卵を雄雌交代で抱卵する。雛はダイサギに類似するが、口角が眼の後方を越えないので容易に識別できる。大原や木月のコロニーでは亜高木を利用せず、丈の低いメダケの群生に営巣する。

(武下)

準絶滅危惧 (福岡県)

ヘラサギ

コウノトリ目 トキ科 Threskiornithidae

学名: *Platalea leucorodia major* Temminck & Schlegel, 1849

カテゴリー: 情報不足 (環境庁)

生息状況・危機の状況・選定理由: 福岡市瑞梅寺川河口ではクロツラヘラサギとともに毎年1羽～数羽が越冬する。同河口では、河川の改修やしゅんせつが行われると、ねぐらである中州が消失する可能性があり、本種の越冬に重大な影響を与えられる。また付近に大学移転計画が決定しており、それに伴う周辺環境の改変や道路整備などによる生息環境の悪化が懸念される。

分類・形態: 全長86cm。全身白色で頸と足は長い。嘴は黒くて長いしゃもじ型で、先端付近は黄色。嘴の基部から眼先につながる線状の黒い裸出部があり、よく似たクロツラヘラサギとの識別点となっている。夏羽では冠羽が長く伸び、冠羽と胸が黄色味を帯びる。冬羽では冠羽は短くなり、黄色味も消える。若鳥は全身やや汚れた感じの白色、嘴は暗紫褐色、冠羽は短い。初列風切の先端が黒く、飛ぶと目立

つ。

分布: (県内) 瑞梅寺川河口では毎年数羽が越冬する。近年博多湾東部の埋立地や和白干潟でも数羽が越冬するようになった。その他の地域ではまれである。津屋崎町末広、北九州市曾根干潟、奥洞海などで記録がある。

(県外) まれな冬鳥として各地で記録があるが、西日本の方が記録が多い。

(国外) ユーラシア大陸の温帯地域に広く分布し、冬は越冬のため南下する。

生活史・生態・生息地: 瑞梅寺川河口には11月～1月に飛来する。クロツラヘラサギと行動をともにすることが多く、瑞梅寺川やほかの越冬地での習性はクロツラヘラサギと変わらない。

(岡部)

準絶滅危惧 (福岡県)

コクガン

カモ目 カモ科 Anatidae

学名: *Branta bernicla orientalis* Tugarinov, 1941

カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (環境庁), 希少種 (水産庁)

生息状況・危機の状況・選定理由: 県内では秋から春にかけてまれに渡来し、越冬することもある。カモ類と同所的に生息するため、狩猟では誤射される恐れがあり、渡来時には配慮を要する。

分類・形態: 全長61cm。小型のガン類。全身ほぼ黒色で、下尾筒、上尾筒は白く、脇には淡色の羽縁があり、頸に白い模様がある。嘴、足は黒色。

分布: (県内) これまで記録があるのは、福岡市瑞梅寺川河口、室見川河口、志賀島、海の中道、和白干潟、前原市加布里湾、北九州市曾根干潟などである。

(県外) 青森県および北海道南部では大きな群れが見られるが、ほかの地域では数が少なく、西日本ではまれである。国内の越冬数は1000羽に満たない。

(国外) ユーラシア大陸の極北部で繁殖し、東アジア、ヨーロッパ、アメリカなどで越冬する。

生活史・生態・生息地: 主に岩礁の海岸などに渡来し、農耕地や河川、干潟などに入ることは少ない。岩に付着した藻類などを採食する。

法令などの指定状況: 文化財保護法 (種指定の天然記念物)

(岡部)

準絶滅危惧 (福岡県)

マガン

カモ目 カモ科 Anatidae

学名: *Anser albifrons frontalis* Baird, 1858
カテゴリー: 準絶滅危惧 (環境庁)

生息状況・危機の状況・選定理由: 県内では秋から春にかけてまれに渡来する。ほとんどの場合、短期間の滞在であるが、越冬することもある。比較的記録が多い福岡市瑞梅寺川河口周辺では、餌場となる周辺の農地は鳥獣保護区などに指定されておらず、誤射の危険性があり、渡来時には配慮を要する。

分類・形態: 全長72cm。大型のガン類。全身ほぼ褐色で、下尾筒と上尾筒は白い。背中、翼、腹には淡色の羽縁があり、腹には不規則な黒帯がある。嘴は桃色で、嘴の基部の周囲は白い。足は橙色。若鳥は嘴が橙色で、嘴基部の白色と腹の黒帯はない。「カハハン、カハハン」と大きな声で鳴く。

分布: (県内) これまで記録があるのは、瑞梅寺川河口周辺、粕屋町駕与丁池、北九州市曾根新田などである。

(県外) 最も渡来数が多いのは宮城県で、石川県や

島根県にも大きな群れが渡来する。国内の越冬数は約40,000羽といわれている。西日本では島根県、鳥取県以外ではまれである。

(国外) ユーラシア大陸の北部で繁殖し、東アジアやヨーロッパなどの温帯地域で越冬する。

生活史・生態・生息地: 広大な農耕地に大きな池や沼、河川が隣接する環境に渡来する。池や沼をねぐらとし、広い農耕地で採餌を行う場合が多い。イネ科植物の種子やマコモなどを食べる。瑞梅寺川河口周辺では秋の記録が多いが、越冬例もある。河口部で休息し、採餌は朝夕に水田地帯で行うことが多く、イネの二番穂や落ち穂を食べている。

法令などの指定状況: 文化財保護法 (種指定の天然記念物)

(岡部)

準絶滅危惧 (福岡県)

ヒシクイ

カモ目 カモ科 Anatidae

学名: 亜種ヒシクイ *Anser fabalis serrirostris* Swinhoe, 1871
亜種オオヒシクイ *Anser fabalis middendorffii* Severtzov, 1873
カテゴリー: 亜種ヒシクイ 絶滅危惧Ⅱ類 (環境庁)
亜種オオヒシクイ 準絶滅危惧 (環境庁)

生息状況・危機の状況・選定理由: 県内では秋から春にかけてまれに渡来する。ほとんどの場合、短期間の滞在であるが、越冬することもある。比較的記録の多い福岡市瑞梅寺川河口周辺では、餌場となる周辺の農地は鳥獣保護区などに指定されておらず、誤射の危険性があり、渡来時には配慮を要する。

分類・形態: 本種は5亜種に区分され、日本に渡来するのは亜種ヒシクイと亜種オオヒシクイの2亜種である。県内には両亜種とも渡来するものと思われる。全長67cm。大型のガン類。全身ほぼ黒褐色で、下尾筒と上尾筒は白い。嘴は黒く、先端に橙色の帯がある。足は橙色。「ガガン、ガガン」と大きな声で鳴く。

分布: (県内) これまで記録があるのは、瑞梅寺川河口周辺、北九州市曾根、響灘、頓田、伊川、行橋市今川、直方市遠賀川河川敷などである。

(県外) 亜種ヒシクイは、主に宮城県に渡来し、国内の越冬数は約6000羽。亜種オオヒシクイは新潟、石川、滋賀、茨城、島根などの各県に渡来し、国内の越冬数は約7000羽といわれている。

(国外) ユーラシア大陸の北部で繁殖し、東アジア、中央アジア、ヨーロッパなどで越冬する。

生活史・生態・生息地: 広大な農耕地に大きな池や沼、河川が隣接する環境に渡来する。池や沼をねぐらとし、広い農耕地で採餌を行う場合が多い。イネ科植物の種子やマコモなどを食べる。瑞梅寺川河口周辺では11月の記録が多い。河口部で休息し、採餌は朝夕に水田地帯で行うことが多く、イネの二番穂や落ち穂を食べている。

法令などの指定状況: 文化財保護法 (種指定の天然記念物)

(岡部)

準絶滅危惧 (福岡県)

オシドリ

カモ目 カモ科 Anatidae

学名: *Aix galericulata* (Linnaeus, 1758)
カテゴリー: LR nt (IUCN)

生息状況・危機の状況・選定理由: 県内では冬鳥として渡来し、最も多いのが福岡市曲渕ダムで、200羽ほどが越冬し、繁殖の観察例もある。その他、定期的な渡来地としては、福岡市志賀島(120羽ほど)、若宮町力丸ダム(100羽ほど)、鴨生田池(1999年93羽、2000年5羽)、江川ダム、日向神ダム、北九州市道原水源地などがある。鴨生田池は1997年ごろまでは100羽ほどが毎年越冬していたが、オシドリの生息する場所で魚釣りが行われるようになってからは数が激減し、2000年の調査ではわずか5羽にとどまった。同じような例が潁田町でもあり、今後の対策が必要である。

分類・形態: 全長45cm。雄は嘴が紅色で先端が白い。後頭に冠羽状の羽毛を持ち、眼から後ろは白く、頬と脇腹は橙色。胸の脇に白い2本の線がある。足は橙色。翼には、帆のような銀杏羽と呼ばれる橙色の飾り羽があり、色彩に富んでいて見間違えることは

ない。雌は全体に黒味を帯びた褐色で、眼の周囲から後方にかけて白い線があり、胸から脇腹にかけて白い斑点がある。

分布: (県内) 曲渕ダム、志賀島、力丸ダム、鴨生田池、江川ダム、日向神ダム、北九州市道原など
(県外) 主に中部地方以北で繁殖し、本州以南で越冬する。

(国外) 東アジアの固有種である。

生活史・生態・生息地: 木陰の多い山地の湖などに生息する。木の枝をねぐらとし、よく木にとまる。主にカシ類、ナラ類などのドングリを食べるほか水生昆虫なども食べる。繁殖期には水辺の周辺の樹洞などに営巣することが多いが、水辺からかなり離れた場所に営巣することもある。巣箱を利用して繁殖することもある。

(小副川)

準絶滅危惧 (福岡県)

アカハジロ

カモ目 カモ科 Anatidae

学名: *Aythya baeri* (Radde, 1863)
カテゴリー: 情報不足 (環境庁), VU (IUCN)

生息状況・危機の状況・選定理由: 県内では冬鳥としてまれに渡来する。ほかのカモ類と同所的に生息するため、狩猟の際に誤射される恐れがあり、渡来時には配慮を要する。

分類・形態: 全長45cm。全体的に茶褐色の中型のカモ類。雄の頭部は緑色光沢のある黒色で、胸は赤褐色。背中や脇腹は暗褐色で、脇には白い波状の羽縁がある。下尾筒は白くて目立つ。虹彩は白い。雌は頭部が暗褐色で、虹彩は暗色。

分布: (県内) 福岡市瑞梅寺川河口周辺では比較的

記録が多い。福岡市和白、多々良川河口、大濠公園、室見川、前原市、築城町などで記録がある。

(県外) まれな冬鳥として各地で記録がある。

(国外) シベリア東南部、中国東北部で繁殖し、中国南東部から東南アジアにかけて越冬する。

生活史・生態・生息地: 淡水ガモで、池や河川を好み、海域や河口部ではあまり見られない。ホシハジロやキンクロハジロの群れに混じることが多い。潜水して水生植物や水生動物などを捕食する。

(岡部)

準絶滅危惧（福岡県）

シノリガモ

カモ目 カモ科 Anatidae

学名：*Histrionicus histrionicus pacificus* Brooks, 1915

カテゴリー：絶滅の恐れのある地域個体群（環境庁）

生息状況・危機の状況・選定理由：県内では毎年20羽程度が冬鳥として渡来し、福岡市の志賀島から海の中道にかけての玄界灘に生息する。これは恒常的越冬地として、同様に越冬するクロガモ、ビロードキンクロとともに、我が国における最南端のものといえる。特にシノリガモにあっては、東アジアの個体群としても最南端といえよう。従来、志賀島の二見岩沖を中心に越冬してきたが、最近では海の中道のシオヤ瀬を主体に付近の定置網周辺などでも見られ、分散傾向にある。年による個体数はあまり変わらず、安定しているといえる。まれに渡りの時期にほかの地域でも観察され、福岡市今津、新宮町相島などで記録がある。

分類・形態：全長43cm。潜水性のカモで、雄は全身紫黒色に複雑な白斑を持つ。桐原ら（2000）参照。

分布：（県内）志賀島周辺で越冬する。

（県外）主に関東地方以北に冬鳥として普通に渡来

する。1976年青森県の赤石川上流で国内初の繁殖が確認された。その後、岩手県、宮城県でも繁殖が確認され、北海道でも十勝地方、知床などで繁殖していると考えられている。いずれも山間の溪流である。

（国外）シベリア東部から北米大陸西部を主な繁殖地とし、冬は若干南下して越冬し、少数は繁殖地付近で越冬する。

生活史・生態・生息地：県内では10月末に渡来し始め、4月末頃まで観察されるが、夏季の観察例もある（例えば1999年6、7月、海の中道1羽）。活発に海に潜り、貝類、甲殻類、魚類を食べるといい、繁殖地では主に水生昆虫を食べるといふ。本来、外海に面した波の荒い海岸を好むカモであるが、県内では定置網周辺で観察することが多く、網やロープなどへの付着生物への依存をうかがわせている。

（山根）

準絶滅危惧（福岡県）

ミサゴ

タカ目 タカ科 Accipitridae

学名：*Pandion haliaetus haliaetus* (Linnaeus, 1758)

カテゴリー：準絶滅危惧（環境庁）

生息状況・危機の状況・選定理由：県内の海岸部のほぼ全域に周年生息し冬季は個体数が増える。北九州市曾根干潟では1994年に、沖の定置網の竹竿にとまっている12羽を同時に記録した。福岡市瑞梅寺川河口でも、同時に19羽が記録されたことがある。

分類・形態：全長雄約56～雌61.5cm。翼開張雄約147～雌約168.5cm。飛行時は下面は白く胸部に褐色の帯が目立つ。猛禽類の飛行は類似型が多く、高度が高いと識別困難であるが本種は容易に識別できる。

分布：（県内）玄界灘から周防灘の海岸線各所や、大牟田市沖の三池島、初島で記録されている。

（県外）東日本で夏を過ごしたものは、秋に西日本へ移動してくる。

（国外）北半球全域とオーストラリアで繁殖する。

生活史・生態・生息地：海辺や河川で生きた魚を捕獲する。海上などで高度50～100mくらいを巡回飛行し、獲物を発見すると急降下し両足で水面を蹴る

ように獲物を捕獲する。しかし、失敗することも多い。捕獲時には両足を前後にして魚を運ぶが、魚が大きいと高度を上げるのに苦勞し、力強く羽ばたきながらしばらくは水面上を飛行している。定置網などの棒杭の上にとまって捕食する。内陸にはあまり飛来しないが、北九州市皿倉山や道原水源地でも記録がある。道原水源地では20cm大のブラックバスを、枝上で13分間要して食べるのが観察されたことがある。北九州市白島の岩礁の最上部に皿型の巣を造り、雛を育てた記録があるが、個体数は多いが繁殖地の報告は少ない。曾根干潟や瑞梅寺川河口の、複数の個体の繁殖地は現在のところ不明である。玄界灘の地島、大島、相島などの陸地に近い島嶼や、志摩町彦山の海に面した崖地の樹木に営巣、繁殖する可能性が高いと考えられる。

（武下）

準絶滅危惧 (福岡県)

ハチクマ

タカ目 タカ科 Accipitridae

学名: *Pernis ptilorhynchus orientalis* Taczanowski, 1891

カテゴリー: 準絶滅危惧 (環境庁)

生息状況・危機の状況・選定理由: 県内の山地は春と秋の渡りのメインルートとなっている。特に秋の渡りの9月下旬から10月初旬には、北九州市風師山、皿倉山、鞍手町六ヶ岳、剣岳、福岡市油山、志賀島などで主に東から西への移動が見られる。県内の森林は渡り期に重要な休息場所となるため、開発に伴う休息地の減少などが懸念される。また、繁殖地では餌のジバチ類の個体数に生息が左右される問題もある。

分類・形態: 全長雄約57～雌約60.5cm。翼開張121～135cm。森岡ら (1995) 参照。

分布: (県内) 9月後半～10月初めの渡りの時期に、東から西へ向かう群れが観察される。英彦山などで繁殖期にも観察されるが、繁殖は未確認である。

(県外) 主として本州の近畿地方以北の低山の林で繁殖するとされてきたが、近年、徳島県、愛媛県、熊本県などで繁殖が確認されており、北海道から九州までの広範囲で繁殖していると推測される。

(国外) バイカル湖西部からアムール川下流地方、ウスリー地方、サハリンに至る極東から、南はモン

ゴル東部、中国の河北、黄河下流域に生息し、東南アジアで越冬する。なお東南アジア地域で繁殖するグループは周年同じ地域に生息する。

生活史・生態・生息地: 名前のとおりハチ類の幼虫が餌で、クロスズメバチ (ジバチ) の巣を地中から足と嘴で掘り出す。4月中旬～5月中旬にかけて渡来し繁殖する。繁殖期には長い翼を上へ伸ばして急降下し、羽ばたいて急上昇するディスプレイ飛行を行う。9月中旬～10月初めにかけて東から西へ移動する群れが各地で見られる。渡りの時は、帆翔で上昇気流にのり高度を上げ滑翔することをくり返す。秋の渡りは群れが比較的大きくルートが解明されつつある。中部地方から中国地方をとおり、福岡、長崎へぬける北寄りコースと愛知県伊良湖岬から四国をとおり、大分から九州を横断し長崎へぬける南寄りコースがある。長崎に集結した群れは、西方向へと大陸へ向かう。春の渡りは群れが小さくまだ謎が多い。

(小副川)

準絶滅危惧 (福岡県)

オオタカ

タカ目 タカ科 Accipitridae

学名: *Accipiter gentilis fujiyamae* (Swann & Hartert, 1923)

カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (環境庁)

生息状況・危機の状況・選定理由: 県内では、10月、11月、および3月に記録が多く、主に渡りの途中に通過する程度と考えられる。また県内では確かな繁殖記録がなく、保全する場所が特定できない。一般に飼育のための捕獲、または剥製にするための捕殺や越冬地周辺の開発が生存に対する脅威となっている。

分類・形態: 全長雄約47～雌約59cm。翼開張雄約106～雌約131cm。森岡ら (1995) 参照。

分布: (県内) 県内では渡りの時期に見られることが多く、繁殖期の4月中旬～5月上旬に本種が観察されることはほとんどない。冬季の記録もあるが少ない。近年、冬季に宮田町力丸ダム周辺、川崎町大ヶ原、那珂川町五ヶ山で複数の記録があり、越冬しているものと考えられる。確実な繁殖例はない。

(県外) 本州以南と台湾で記録がある。

(国外) 種としてのオオタカはユーラシア大陸・北米大陸の温帯・寒帯に広く分布。

生活史・生態・生息地: 山地から平地の林に生息するが、農耕地や水辺など開けた場所に出て獲物を探すこともある。開けた所を飛ぶときは、羽ばたきに滑翔を交えて直線的に飛ぶ。鳥では、主にツグミ大の小鳥から大型のキジ類まで捕食する。ノウサギ、リスなどの哺乳類も捕食する。年に1回繁殖し、針葉樹、特にアカマツなどの大木の枝上に枯枝を積んで皿形の巣をつくる。

法令などの指定状況: 種の保存法 (国内希少野生動物植物種)

(小副川)

準絶滅危惧 (福岡県)

ハイタカ

タカ目 タカ科 Accipitridae

学名: *Accipiter nisus nisosimilis* (Tickell, 1833)

カテゴリー: 準絶滅危惧 (環境庁)

生息状況・危機の状況・選定理由: 県内では9月~4月にかけて冬季の記録が多い。また秋と春の渡りの時期に特によく見られる。県内は重要な越冬地として、これからの保全が大切であると思われる。

分類・形態: 全長雄約30~雌約40cm。翼開張雄約60.5~雌約79cm。雄成鳥は上面が暗青灰色で胸から腹にかけてオレンジ色の横縞がある。雌成鳥は上面が雄成鳥より褐色を帯び、胸から腹にかけて黒灰色の横縞がある。飛んでいるとき、翼はやや幅広く、尾は長く見える。

分布: (県内) 飯塚市八木山、庄内町、那珂川町五ヶ山などでは冬季に複数の記録があり、越冬しているものと思われる。秋と春の渡りの時期に特によく見られる。添田町英彦山では繁殖期の記録もあるが、繁殖は確認されていない。宮田町千石では夏季に落

鳥記録もある。

(県外) 北海道と本州で繁殖しているが、四国、九州でも繁殖の可能性はある。冬季は北海道から九州で見られる。

(国外) ユーラシア大陸に広く分布し、北のものは冬季に南下する。

生活史・生態・生息地: 移動するときは、羽ばたきと滑翔を繰り返して直線的に飛ぶ。高い木の上や枝先にとまり、獲物を見つけると飛び立って足の爪で小鳥類や小型獣類を捕獲する。国内の繁殖地では、留鳥であるものも多いが、冬季に餌の少なくなる地域のもの平地や農耕地へ移動したり、より南下しているものと思われる。

(小副川)

準絶滅危惧 (福岡県)

サシバ

タカ目 タカ科 Accipitridae

学名: *Butastur indicus* (Gmelin, 1788)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 人里近くに生息するため、各種の開発により繁殖環境の消失、悪化が懸念される。また水田が減少すれば餌となるヘビやカエルの生息が困難となり、本種の受ける影響は大である。

分類・形態: 全長雄約47~雌約51cm。翼開張102.5~115cm。ハシボソガラスほどの大きさで、赤褐色のタカである。飛んでいる時、翼は細長く、翼端はとがって見える。森岡ら(1995)参照のこと。

分布: (県内) 人里近くの低山の森林に夏鳥として渡来し、繁殖している。

(県外) 本州、佐渡、伊豆諸島、北硫黄島、四国、九州、対馬、馬渡島、南西諸島、南大東島で記録がある。奄美以南では越冬している。

(国外) アムール地方南部、ウスリー地方、中国東北地方から河北省までで繁殖している。また朝鮮半

島北部でも繁殖の可能性はある。台湾、中国南部、ミャンマー、インドシナ、マレー半島、フィリピン、ボルネオ、スラウエシ、マルク諸島、ニューギニアなどで越冬する。

生活史・生態・生息地: 低山の森林で繁殖し、周辺の開けた水田などで採餌する。ヘビ、トカゲ、カエル、昆虫類をはじめ、ネズミや小鳥類を捕食することもある。3月末から4月中旬にかけて東南アジア方面から渡ってきて繁殖する。繁殖期には急降下と急上昇を繰り返す波状飛行や、「キンミー」と鳴きながら帆翔するなどのディスプレイが見られる。秋の渡りは10月上旬で、愛知県の伊良湖岬や鹿児島県の佐多岬では南へわたる本種の大きな群れが見られる。

(小副川)

準絶滅危惧 (福岡県)

ヒクイナ

ツル目 クイナ科 Rallidae

学名: *Porzana fusca erythrothorax* (Temminck & Schlegel, 1849)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 県内では留鳥として生息する。ヨシ群落、河川、水田などに生息するが、湿地の減少により生息環境は失われつつある。また水田などに散布された農薬により餌となる小動物が減少したことも考えられる。本種が生息する湿地環境は近年減少しており、生息地や個体数は減少している。

分類・形態: 全長22.5cm。顔から胸にかけては赤茶色で、後頸、背面、翼は暗緑褐色。脇、下腹、下尾筒は白と黒の横斑がある。虹彩は赤く、足も赤い。

分布: (県内) 全域の河川、ため池、農耕地などの水辺に生息する。

(県外) 全国に分布。北の地域のもは夏鳥である。

(国外) 中国、朝鮮半島、東南アジア、インドに分布

生活史・生態・生息地: 河川やため池などのヨシ群落、水辺の草地、休耕田などの湿地に生息する。かつては夏鳥とされていたが、近年越冬するものも多くなることが明らかになった。繁殖期には雄は「キョッ、キョッ、キョッ」と一声ずつ区切って鳴いた後、続けて「キョキョキョキョ・・・」と連続した声で鳴く。草の間や稲株の間に巣を作り、5~9個の卵を産む。主に昆虫類やミミズ類などを捕食するが、植物の種子なども食べる。

(岡部)

準絶滅危惧 (福岡県)

タマシギ

チドリ目 タマシギ科 Rostratulidae

学名: *Rostratula benghalensis benghalensis* (Linnaeus, 1758)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 県内では留鳥として生息する。主に水田やハス田などの湿地環境に生息するが、農地の減少や水路のコンクリート化などにより生息環境は失われつつあり、個体数が減少している。

分類・形態: 全長23.5cm。雌のほうが雄よりも美しい。雄雌とも眼の周囲の白と、胸と翼の間の白線とそれに続く背の外側の黄色い線が目立つ。雌は喉から胸にかけて赤褐色、雄は灰褐色。翼には複雑な模様がある。

分布: (県内) 全域の農耕地に分布

(県外) 福島以西の本州、四国、九州に分布

(国外) 中国南部、東南アジア、インド、アフリカ、オーストラリアに分布

生活史・生態・生息地: 水田地帯やハス田に生息する。5月頃から繁殖期に入り、雌が雄に対して求愛を行う。雌は夜間「コォーコォー」と鳴き雄を呼ぶ。休耕田や畦などに皿形の巣を作る。巣作りや抱卵、ヒナの世話は雄が行う。一妻多夫で、雌は1巣分の卵を産み終わると更に別の雄を選ぶ。昆虫類や植物の種子などを食べる。

(岡部)

準絶滅危惧（福岡県）

ケリ

チドリ目 チドリ科 Charadriidae

学名：*Vanellus cinereus* (Blyth, 1842)

カテゴリー：LR nt (IUCN)

生息状況・危機の状況・選定理由：以前は春、秋の渡りの時期や越冬期に観察されることがあったが、数は多くなく1～数羽程度だった。古賀市で1987年頃から数つがい繁殖するようになり、次第に県内各地へ繁殖分布が広がった。現在も分布は拡大中と思われ個体数も増加している。しかし、依然として分布は局地的であり、人間活動や天災による繁殖失敗がよく起こるため、個体群の動向には注意が必要である。

分類・形態：全長36cm。チドリ類の中では大型で、足が長い。成鳥夏羽では頭部から胸にかけて青灰色で、胸と腹の境界に黒くて太い横帯がある。腹は白く背面は褐色。嘴と足は黄色。翼を広げると初列風切、初列雨覆が黒く、次列風切、大雨覆の白色とのコントラストが明瞭である。成鳥冬羽では頭部から胸も褐色味を帯びる。

分布：(県内) 古賀市、宮田町、若宮町、北九州市、飯塚市などで繁殖が確認されている。その他の地域

でも春、秋の渡りの時期に観察されたり、少数が越冬することもある。

(県外) 近畿地方から東北地方にかけて留鳥として分布するが、局地的である。特に東海地方から近畿地方の太平洋側に多い。北海道や中国地方以南ではまれな旅鳥である。

(国外) 中国東北部で繁殖し、冬は中国南部、ベトナム、ラオス、タイ、ミャンマーなどへ渡る。

生活史・生態・生息地：農耕地などの開けた環境に生息する。繁殖期は3～7月。一夫一妻制で繁殖し、田の畦や休耕田の地上に巣を造る。田起こし前に造った巣が農作業により破壊されることもしばしば起こっている。巣や雛に人やイヌなどの外敵が近付くと、「ケリリ」と強い声を出し飛翔して襲いかかってきたり、擬傷して注意を引いたりして防衛する。繁殖を終えると近隣個体が集まり小群をつかって生活する。地上で主に昆虫類などを食べる。

(増田)

準絶滅危惧（福岡県）

シベリアオオハシシギ

チドリ目 シギ科 Scolopacidae

学名：*Limnodromus semipalmatus* (Blyth, 1848)

カテゴリー：情報不足（環境庁），LR nt (IUCN)

生息状況・危機の状況・選定理由：県内ではまれな旅鳥として観察され、記録のない年もある。主に春（4、5月）に1羽で観察され、秋の記録は極めてまれである（1984年9月5日、16日大和干拓1羽）。干潟への依存度の高い種であるが、日本は主要な渡りのルートより外れており、国外でも危険な状態を脱している。

分類・形態：全長33cm、嘴が太くて長く黒い。足も長い。夏羽では頭部より腹部にかけ赤褐色で体形とともにオグロシギを一回り小さくしたようになる。桐原ら（2000）参照。

分布：(県内) 苅田町松山、福岡市今津、和白、雁の巣などで記録がある。

(県外) 日本では1972年青森県での初記録以来、全

国的に記録はあるもののまれである。

(国外) ロシア中央より東シベリアにかけてのステップ地帯、モンゴル、中国北東部にかけて局地的に繁殖し、冬はフィリピン以南の東南アジア諸島からオーストラリアにかけて越冬する。スマトラ島、ジャワ島が最も主要な越冬地である。かつては少ないとされていた総生息数は現在少なくとも20000羽 (del Hoyo et al., 1996) とされる。

生活史・生態・生息地：干潟にすることが多いが、後背地の水田で観察されることもある。オグロシギやオオソリハシシギとともにいることも多い。嘴を干潟にさし込み、忙しく上下に動かし、小動物を探している。

(山根)

準絶滅危惧（福岡県）

アカアシシギ

チドリ目 シギ科 Scolopacidae

学名：*Tringa totanus ussuriensis* Buturlin, 1934

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（環境庁）

生息状況・危機の状況・選定理由：県内では旅鳥として渡来し一部は越冬することもある。県内では少数ながら恒常的に記録され、環境の選択幅が広く、かつ国外では、生息数の多い種である。

分類・形態：全長27.5cm、嘴と足が赤い中形のシギで飛ぶと腰と次列風切が白い。夏羽では下面の黒っぽい縦斑が目立つ。桐原ら（2000）参照。

分布：（県内）北九州市曾根、福岡市今津、多々良川、和白、雁の巣などで記録がある。春（3～5月）と秋（8～11月）に、成鳥幼鳥を問わず毎年観察されるが、秋の幼鳥を除き1羽のことが多い。1～5羽の小群で観察され10羽を越すのはまれである。10羽の事例としては、1996年5月11日福岡市アイランドシティ埋立地の記録がある。

（県外）1972年北海道東部で繁殖しているのが初めて確認され、現在も少なからず繁殖している。にも

かかわらず、春、秋の渡りの記録は、本州以東では少ない。九州、沖縄諸島では比較的記録が多い。沖縄県では少なからず越冬している。

（国外）6亜種に分けられるが、種全体としてはユーラシア大陸の温帯域に広く分布し繁殖する。アイスランドから西ヨーロッパにかけての一部は留鳥であるが、ほかはアフリカから東南アジアにかけて越冬する。全亜種とも絶滅の危険性はないものの、例えば旧北区西側（ヨーロッパ）では1970年代以降繁殖個体数が減少しているという。

生活史・生態・生息地：干潟、河口、水田のほか、埋立地にもよく入る。北海道では湿原で小さなコロニーを形成して集団繁殖しているという。当地では水辺または水中を活発に歩き回って小動物を捕らえ、かなりの深さもいとわれない。

（山根）

準絶滅危惧（福岡県）

コマドリ

スズメ目 ツグミ科 Turdidae

学名：*Erithacus akahige akahige* (Temminck, 1835)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：本種は繁殖地が標高1000m以上の場所であり、県内での繁殖地は限定されていて、繁殖地周辺の保全が必要である。

分類・形態：全長13～15cm。雄は頭部から上胸がオレンジ色で、胸から脇は灰黒色で腹にかけて淡色になる。背と翼は褐色味を帯びる。雌は全体的に雄と比べて褐色味が強い。

分布：（県内）英彦山、豊前市犬ヶ岳周辺では一時確認例が減ったが、近年は繁殖期に数個体確認されていて繁殖している可能性が高い。福岡市脊振山系では繁殖期に鳴き声が聞かれたこともある。また北九州市石峰山、直方市鴨生田公園や飯塚市高雄団地など市街地でも渡り途中と思われる本種の鳴き声の

確認例が数例ある。

（県外）北海道から屋久島までの山地に渡来し、繁殖する。

（国外）サハリン、南千島でも繁殖し、中国南部で越冬する。

生活史・生態・生息地：主に、標高1000m以上の亜高山帯の夏緑樹林帯に生息する夏鳥で、4月下旬ごろからさえずりを始める。「ヒンカラカラカラ」という馬のいななきに似た声でさえずり、名前もこのさえずりによる。クマザサなどの林床植物が茂る暗い林を好み、昆虫類を主な餌とする。

（小副川）

準絶滅危惧（福岡県）

オオヨシキリ

スズメ目 ウグイス科 Sylviidae

学名：*Acrocephalus arundinaceus orientalis* (Temminck & Schlegel, 1847)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：県内のヨシ群落のある海岸、河口、河川敷、湖沼畔などで繁殖する。繁殖には割合広いヨシ群落が必要であることから、埋立、護岸工事などにより広いヨシ群落が減少するとともに、著しくその数を減らしている。

分類・形態：全長18.5cm。体の上面はオリーブ黄褐色で下面はうす白色。五百沢ら（2000）参照。

分布：（県内）北九州市響灘、曾根の海岸部、福岡の沿岸部、室見川河口、筑後川下流域、有明海沿岸部のほか、筑豊地区の遠賀川の上流域、小竹町、庄内町などでも生息、繁殖している。

（県外）九州～北海道まで広く分布するが、九州、四国、中国地方南部および北海道東部ではあまり多くない。

（国外）東南部シベリア、中国中北部、モンゴルで繁殖し、冬季東南アジア、インドに渡る。

生活史・生態・生息地：4月下旬から5月中旬までに渡来し、9月上旬から下旬にかけて渡去する。その特徴ある大きな声から、夏の風物詩（季語の行々子）となっている。広いヨシ群落のある海岸、河川敷、湖沼畔などにすみ、ヨシ群落の中に巣をつくる。

主に昆虫類を捕食する。高地ではカッコウの託卵種の一つになっている。ヨシの茎に直立した姿勢で立ちまわり、「ギョギョシ、ギョギョシ、ケケシ、ケケシ」と大きく口を開き、赤橙色の口の中が見えるほどに大きな声で鳴く。

（松富士）

準絶滅危惧（福岡県）

キビタキ

スズメ目 ヒタキ科 Muscicapidae

学名：*Ficedula narcissina narcissina* (Temminck, 1835)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：県内では一般的な夏鳥として主に丘陵地や山地の広葉樹林で見ることができる。山地では特に減少傾向は見られないが、丘陵地では宅地や埋立処分場造成などによる樹林地の伐採のため、生息地そのものが減少している。また渡りの時期に見られる個体数は、ここ10年で見ると著しく減少しており、全国規模での個体数の減少が見られる。越冬地である東南アジアでの森林伐採などの環境悪化が大きく影響しているといわれている。

分類・形態：全長13.5cm。雄は上面が黒、眉斑・下面・腰は黄色。翼に白の斑点がある。雌は上面・脇はオリーブ褐色、脇から腹にかけて淡い色になり腹部は白に近い。

分布：（県内）全域の丘陵地から山地に夏鳥として渡来する。渡りの時期には町中の公園などでも見られ、玄界灘の島ではよく見られる。

（県外）島嶼（国後島も含む）を含むほぼ日本全国で繁殖する。

（国外）サハリン、冬季はベトナム、フィリピン、マレーシア

生活史・生態・生息地：福岡県には4月頃渡来する。観察記録は4～6月に集中するが、これは繁殖期によく通る声でさえずり、容易に確認できるためである。丘陵地から山地にかけて生息するが、標高の高い所では少ない。主に昆虫類を食べる。10月頃渡去するが遅い年には11月の記録もある。

（皆合）

準絶滅危惧（福岡県）

オオルリ

スズメ目 ヒタキ科 Muscicapidae

学名：*Cyanoptila cyanomelana cyanomelana* (Temminck, 1829)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：県内では山地の沢沿いでは普通に見られるが、ダム開発や廃棄物処分場造成などの人為的影響による生息地の減少が懸念される。また渡りの時期に見られる個体数は、ここ10年で見ると著しく減少しており、全国規模での個体数の減少が見られる。越冬地である東南アジアでの森林伐採などの環境悪化が大きく影響しているといわれている。

分類・形態：全長16.5cm。雄の頭部から背・脇・尾はあざやかな瑠璃色。顔は黒色、腹部は白色。雌は頭部から尾にかけて淡褐色、腹は白色。

分布：（県内）全域の山地に夏鳥として渡来する。

渡りの時期には、町中の公園などでも見られ、玄界灘の島ではよく見られる。

（県外）島嶼を含むほぼ日本全国

（国外）朝鮮半島、中国東部で繁殖し、冬季は台湾、ベトナム、マレーシア、フィリピンなどに渡る。

生活史・生態・生息地：県内には3月末～4月上旬頃渡来し、山地の沢沿いの林を好んで生息する。繁殖期に雄は木の梢付近で大きな声でさえずる。渡去は9月末頃で、この時期には10羽程度の群れを確認することもある。

（皆合）

保全対策依存（福岡県）

カササギ

スズメ目 カラス科 Corvidae

学名：*Pica pica sericea* Gould, 1845

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：我が国では、北部九州域のみに生息し、分布は局地的であるが、世界的には広く分布している。県内での1974～1975年と1985年の生息分布調査および1982～1986年の鳥類分布調査（福岡県，1991）では、平野部から山麓へと、カラスと競合する地域でも確実に生息域を広げていて、前原市、福岡市域（雁の巣、室見川中流域、那珂川流域）、小石原村、杷木町、黒木町でも繁殖している。久留米市、柳川市、大川市、筑後市、三橋町、大和町、瀬高町、山川町、三潞町、大木町、城島町が天然記念物の指定地域となっているが、この地域での生息は増加、拡大している。しかし、近年営巣に適した大きな樹木が少なくなったこともあって、電柱に営巣する割合が急増している。分布中心地での天然記念物指定により、電柱への造巣が黙認されてきた過去の経緯が、分布拡大と関連していると考えられる。

分類・形態：全長45cm。ハシボソガラスより小さく、尾が長い。肩羽、腹、初列風切は白く、それ以外は

光沢のある緑黒色。

分布：（県内）前記の天然記念物の指定地域には以前から生息していたが、その後、周辺地域へも分布は拡大している。

（県外）佐賀県の南部域を中心として、長崎県の一部、熊本県北部に生息している。

（国外）種全体としては、ユーラシア大陸の大部分、北アメリカの西半分、アフリカの一部に生息、繁殖している。本亜種はアムール川流域から朝鮮半島、中国南部、東南アジアの中南部までに分布

生活史・生態・生息地：留鳥で、早春、樹木や電柱の上に小枝などで、直径1mに及ぶ球形の巣を作る。電柱の巣で巣材に針金を使用したものがショートして停電の原因となることがある。若鳥は巣立後1か月で独立した群れをつくり、11月下旬から12月にかけてつがいをつくる。

法令などの指定状況：文化財保護法（地域指定の天然記念物）

（松富士）

情報不足 (福岡県)

ウズラ

キジ目 キジ科 Phasianidae

学名: *Coturnix japonica* Temminck & Schlegel, 1849

カテゴリー: 情報不足 (環境庁)

生息状況・危機の状況・選定理由: 県内では冬鳥として渡来するが生息状況は不明な点が多く、渡来数は少ないと考えられる。狩猟鳥であることの個体群への影響は不明である。

分類・形態: 全長20cm。頭部と頸は白く、体は灰黒色。頭頂は赤い皮膚が露出しており、額は黒い。嘴は黄色で、足は黒色。「クルル」と大きく響く声で鳴く。

分布: (県内) 福岡市瑞梅寺川河口周辺では比較的記録がある。福岡市和白、雁の巣、小呂島、北九州市曾根新田、遠賀川河川敷、新宮町相島などで記録がある。県内での繁殖記録はないと思われる。

(県外) 本州以北で繁殖し、九州では冬鳥または旅鳥である。北の地方で繁殖するものは冬季南へ移動する。

(国外) シベリア東南部、中国東北部、朝鮮半島で繁殖し、中国南部で越冬する。

生活史・生態・生息地: 農耕地、原野、荒地、河川敷などの丈の低い草地に渡来する。植物の種子などを食べる。草地の中に潜んでおり、観察は困難である。休耕地で見られることが多い。

法令などの指定状況: 鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律 (狩猟鳥獣)

(岡部)

情報不足 (福岡県)

オオジシギ

チドリ目 シギ科 Scolopacidae

学名: *Gallinago hardwickii* (Gray, 1831)

カテゴリー: 準絶滅危惧 (環境庁), LR nt (IUCN)

生息状況・危機の状況・選定理由: 世界の総個体数は36000羽と推定され (Rose & Scott, 1997)、主要な繁殖地である北海道では、1985年には27400羽が生息するとされた (del Hoyo et al., 1996)。日本では1974年の狩猟禁止以前では毎年2000羽ぐらい、越冬地のオーストラリアでもヴィクトリア州 (1984年)、タスマニア島 (1983年) で狩猟禁止以前には年間10000羽以上狩猟されていた。オーストラリアでは減少傾向が続き、また本州でも高原に局地的に分布し減少傾向にあるという。

分類・形態: 全長30cm。タシギに似るがやや大きく次列風切先端に白線がない。桐原ら (2000) 参照。

分布: (県内) ほかのジシギ類との野外識別が困難なため確実な記録は皆無に等しいが、旅鳥として春 (4月)・秋 (8~9月) にまれならず渡来していると思われる。秋は特にタシギより早く渡来していると思われる。

(県外) 日本が主な繁殖地で、本州中部以北、北海道にかけて繁殖している。また広島県、阿蘇山、九重山などで少数が繁殖している。北海道が分布の中

心で、草原、牧場、湿原などで普通に見られる。その他、北方領土の国後島、色丹島、択捉島でも繁殖する。

(国外) ロシア沿海州、南サハリンでも少数が繁殖し分布を広げつつある。サハリンでは本種は1962年に初めて記録され、1930~1940年代には記録がないので1950年代に島への進出と分布の拡大がなされたと考えられている。主な越冬地はオーストラリア東南部で、タスマニア島、一部ニュージーランドにも及ぶ。

生活史・生態・生息地: 長い嘴を土中にさし込んで採餌するが、ミミズを好むといい、そのためタシギよりは乾いた環境を好み、休耕地、畦、畑、草地などで観察されることが多い。タシギ同様日中は活発に行動することは少ない。北海道での調査によれば、草原、牧場、湿原などで普通に見られるが、最も出現率が高かったのは大きな川の河川沿いで、オオジシギの好む環境としての河川敷の重要性が指摘されている。

(山根)

(文献)

- Chong, J., U. Pak, C. Rim, and T. Kim, 1996. Breeding biology of black-faced spoonbill *Platalea minor*. *Strix*, 14: 1-10.
- Collar, N. J., M. J. Crosby, and A. J. Stattersfield, 1994. *Birds to watch 2, the world list of threatened birds*. 407 pp., BirdLife International.
- del Hoyo, J., A. Elliott, and J. Sargatal, 1992, 1996. *Handbook of the birds of the world*. vol. 1, vol. 3: 696, 821, Lynx Editions.
- 江口和洋, 1998. 福岡県カササギ生息調査報告. 天然記念物カササギ棲息地保存管理計画策定調査報告. pp. 3-19, 福岡県教育委員会.
- 福岡県の自然を守る会, 1973, 1976, 1977, 1978, 1979. 福岡県の自然, 1, 2, 3, 4, 9.
- 福岡県水産林務部緑化推進課, 1979. 福岡県の野鳥.
- 行徳直己, 1989. 福岡県中部におけるカササギの観察記録. わたしたちの自然史, (31): 8-10.
- 林 宏, 1989. 北九州市および周辺でのカササギの記録. わたしたちの自然史, (30): 8.
- 林 宏, 1992. 山田緑地の鳥類. 山田緑地の自然. pp. 201-221, 北九州市立自然史博物館.
- 林 修, 1987, 1988. 頓田貯水池のガンカモ類 (I), (II). わたしたちの自然史, (26): 1-3, (27): 8-9.
- 林 修, 1994. 曾根干潟におけるズグロカモメの越冬個体群について. わたしたちの自然史, (47): 1-3.
- 五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥550 山野の鳥. 359 pp., 文一総合出版.
- IUCN, 1994. IUCN red list categories. 21 pp., IUCN.
- IUCN, 1996. 1996 IUCN red list of threatened animals. 368 pp., IUCN.
- 祝原道衛, 1990. カササギの福岡県における新分布. わたしたちの自然史, (33): 11-13.
- 環境庁, 1975. 沖ノ島. 特定鳥類等調査報告書. pp. 225-268.
- 環境庁, 1978. 柱島, 大机島, 小机島. 特定鳥類等調査報告書. pp. 132-139.
- 環境庁, 1981. 日本産鳥類の繁殖分布. 554 pp.
- 環境庁, 1997. 中国におけるトキの繁殖状況について(お知らせ). <http://www.eic.or.jp/kisha/199704/10241.html>
- 環境庁, 1998. 哺乳類及び鳥類のレッドリストの見直しについて. <http://www.biodic.go.jp/rdb/redlist-new.html>
- 環境庁, 1999. 生物多様性調査鳥類調査中間報告書. 342 pp.
- 川口孫治郎, 1937. 日本鳥類生態学資料. 568 pp., 巢林書房.
- 木原直人, 1995, 1999. 筑後川中流域の野鳥報告書 平成7年度, 平成11年度.
- 北九州市企画局, 1994. 北九州市の野鳥たち. 87 pp., 北九州都市協会.
- 北九州野鳥の会研究部, 1976, 1978. 筑前沖ノ島付属島小屋島のカンムリウミスズメ・ヒメクロウミツバメ繁殖地における人為的被害に関する実態調査 その1 カンムリウミスズメ, その3 まとめ. 28 pp., 37 pp.
- 桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥550 水辺の鳥. 351 pp., 文一総合出版.
- 国広勝, 1988. 洞海湾周辺の野鳥. わたしたちの自然史, (28): 4-8.
- 倉成栄吉, 1962a. 1962. 9. 14 九州最後の?オナガ死す. 九州野鳥, (7): 30.
- 倉成栄吉, 1962b. 九州オナガは絶滅するか? 九州野鳥, (4): 31-32.
- 極東鳥類研究会, 1988, 1990, 1990, 1995. 極東の鳥類, 2, 4, 5, 12.
- 森本嘉人, 1985. 響灘埋立地の野鳥とサンクチュアリ計画について. わたしたちの自然史, (18): 9-13.
- 森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男, 1995. 図鑑日本のワシタカ類. 632 pp., 文一総合出版.
- 永田尚志・大長光純, 1991. 九州, 玄界灘鳥帽子島におけるカンムリウミスズメ *Synthliboramphus wumizusume* の繁殖地の再発見. *Strix*, 10: 259-262.
- 日本湿地ネットワークシギ・チドリ委員会, 1997, 1997. シギ・チドリ全国カウント報告書1996年秋, 1997年春. 130 pp., 271 pp.
- 日本鳥類目録編集委員会, 2000. 日本鳥類目録改訂第6版. 345 pp., 日本鳥学会.
- 日本野鳥の会福岡支部, 1978. 有明の鳥と自然.
- 日本野鳥の会福岡支部・筑豊支部・北九州支部, 1991. 福岡県鳥類分布調査報告書資料編, 図表編.
- 日本野鳥の会北九州支部, 1988, 1993, 1996. 北九州支部研究部報, Vol. 1, Vol. 2, Vol. 3.

- 日本野鳥の会北九州支部・筑豊支部・福岡支部, 1997, 1998, 1999. 福岡県鳥類分布調査報告書 平成8年度, 平成9年度, 平成10年度. 福岡県水産林務部緑化推進課.
- 日本野鳥の会熊本県支部・福岡支部, 1999. 三池島鳥類調査報告書. 48 pp.
- 日本野鳥の会山口県支部, 1990. 山口県版鳥類繁殖地図調査報告書. 337 pp.
- 日本野鳥の会野鳥記録委員会, 1986, 1990, 1992, 1994, 1996, 1997. 野鳥情報. *Strix*, 5: 89-98, 9: 265-268, 11: 377-382, 13: 265-274, 14: 205-211, 15: 149-160.
- 岡山速俊, 1977. 山田弾薬庫跡地の野鳥. 77 pp., 北九州市.
- 岡山速俊, 1982. 北九州市鳥類目録. 19 pp, 北九州市.
- 岡山速俊, 1985~1999. 身のまわりの鳥たち(1)~(50). 西日本文化, (211)~(356).
- 岡山速俊, 1988. 山田弾薬庫跡地の鳥類について. わたしたちの自然史, (27): 5-7.
- 岡山速俊, 1992. 紫川中流域の鳥1991 (上), (下). わたしたちの自然史, (39): 7-10, (40): 10-14.
- 岡山速俊, 1997. 紫川流域のアオバズクの営巣記録. わたしたちの自然史, (62): 1-5.
- 大牟田生物愛好会, 1976. 大牟田の自然.
- Rose, P. M., and D. A. Scott, 1997. *Waterfowl Population Estimates - Second Edition*. 106 pp., Wetlands International.
- 斉藤 充, 1994. フィリピン, オランゴ・ワイルドライフ・サンクチュアリにおける水鳥の種構成と渡りの状況. *Strix*, 13: 143-153.
- 堺 平典, 1975. ツバメチドリの繁殖状況報告書.
- 水産庁, 1995, 1996, 1997, 1998a. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(II), (III), (IV), (V). 日本水産資源保護協会.
- 水産庁, 1998b. 日本の希少な野生水生生物に関するデータブック. 437 pp., 日本水産資源保護協会.
- 武石全慈, 1987. 福岡県小屋島におけるカムリウミスズメの大量斃死について. 北九州市立自然史博物館研究報告, (7): 121-131.
- 武石全慈, 1994. 付記: ズグロカモメに関する覚え書. わたしたちの自然史, (47): 4-5.
- 武石全慈, 1996. ズグロカモメ. 水産庁編, 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(III). pp. 494-500, 日本水産資源保護協会.
- 武石全慈, 1998. ズグロカモメ. 水産庁編, 日本の希少な野生水生生物に関するデータブック. pp. 412-413, 日本水産資源保護協会.
- 武下雅文, 1982. 曽根海岸のカモ類. わたしたちの自然史, (10): 6-8.
- 武下雅文, 1994. 福岡県三池島におけるベニアジサシの新繁殖地の発見. *Strix* 13: 250-253.
- 武下雅文, 1996. 日本におけるズグロカモメの生息記録. *Strix* 14: 182-185.
- 武下雅文・林 修・小林繁樹・村本和之, 1988. 北部九州及び山口県のカモメ類の調査. わたしたちの自然史, (29): 18-21.
- 武下雅文・佐本一雄・林 修, 1993. 福岡県曽根干潟におけるズグロカモメの越冬数の年変化と季節変化. *Strix*, 12: 107-114.
- 武下雅文・佐本一雄・武石全慈, 1994. 福岡県曽根干潟におけるツクシガモ *Tadorna tadorna* の越冬数の年変化と季節変化. *Strix*, 13: 53-63.
- 田村耕作, 1996. 福岡市中央区西公園の鳥類. *URBAN BIRDS*, (49): 24-36.
- 田村耕作, 1998. 福岡市中央区と早良区のシーサイドももち(海浜公園)の鳥類. *URBAN BIRDS*, (53): 2-9.
- 氏原巨雄・氏原道昭, 1992. *BIRDER* スペシャルカモメ識別ガイド. 80 pp., 文一総合出版.
- 矢原徹一, 1996. IUCN レッドリストカテゴリー: 日本語訳とその解説. 保全生態学研究, 1: 1-22.
- 山本健次郎, 1994. 光市牛島におけるカラスバトの生息状況と生態. 山口県立山口博物館研究報告, 20: 1-25.
- 山階芳麿・中西悟堂, 1983. トキ 黄昏に消えた飛翔の詩. 301 pp., 教育社.
- 安田健, 1983, 1984. トキの文献(その1), (その2). 応用鳥学集報, 3: 28-40, 4: 8-28.